
水晶物語

寿々

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水晶物語

【Nコード】

N2329B

【作者名】

寿々

【あらすじ】

ごく普通の田舎町でごく普通の中学生生活を送っていた柊と麻貴。八神神社・別名「御稻荷神社」・で不思議な少女「千代」と出会う。その時から二人の運命の歯車が狂いだした！？和風ファンタジー＋シリアス＆コメディ小説！元「世界の闇よ、砕け散れ」です。

プロローグ・彼女との出会い

星のない夜だった。

その闇の中で何かが自分を呼ぶが聞こえる。

また、まただ。

幼女の声が、耳の中に……………

ここはとある田舎町。

田園風景が広がる田舎町。

田のあぜ道を、二人の少年が歩いている。

一人は真っ黒な髪は肩まで伸ばしていて、歩くたびにその髪がはたはたと揺れる。

「ちよつと、学校行く前に八神神社によってもいいか？」

黒髪の少年が自分よりちいさな少年に尋ねる。

「いいよ！神社によるのは柊くんの日課だもんね」

柊ヒイラギと呼ばれた少年は笑って駆け出した。

その後を、小さな少年が続く。

かるく苔なんかがはえた石段を、ひよいひよいと上がって行く。

「待っててもいいぞ！麻貴！」

麻貴マキと呼ばれた少年は、ボクもいくよ！と

階段を駆け上がった。

八神神社。

何処にでもありそうな、古ぼけた神社。

この神社は、平安時代の初期から作られているそうな。

取り壊そうとすると、狐が怒って村人を喰い始めたらしい。

別名「御稻荷神社」。

「ね、柊くん。として毎日お祈りするの？」

賽銭箱の前で手を合わせている柊に、麻貴が問うた。

「じいちゃんが昔言ってたんだ。毎日お祈りしなきゃ狐が喰いに来
るって」

「信じてるの？柊くんらしくないよ」

「信じてるわけねーだろ！やりたいからやってんだよ」

再び神社に向き直り、手を合わせようとしたそのとき。
境内に、女の子がいた。

高価そうな着物を纏い、

どこか寂しそうな顔をした少女が

大きな丸い目で、こつちをじつと見ていた。

見た目からして5、6歳の少女。

これ以上ないような黒髪をおかっぱに切り

後ろは腰まで垂れている。

赤い大きな珠がついた簪カンザシを挿している。

「……柊くん。この神社、子供いたんだね」

「無視しろ、無視。ガキは関わりと厄介だから」

「はい」

二人は背を向けて神社を後に学校へ行こうとしていた。

「まで」

重く、強い声が二人の耳の中に響いた。

声の主はあの少女。

「幻覚だよね？」

「この場合幻聴だ。だれか幻聴と言ってくれ」

柊はひくついた笑顔で、おそろおそろ振り返った。

あの少女はいない。

「ほら、幻だよ。まぼろし」

「そーだね」

「んなわけあるか」

向き直ると、異様に態度がでかい踏ん返り返った少女が
二人の目の前で浮いていた。

手をぶらりと下げ、顔を二人に近づけ

真っ赤な目で二人を睨む。

「わーっ！！妖怪が出たー！！狐の祟りだー！ゴメンなさい！明日からちゃんとお祈りします！」

麻貴はすっかりテンパって、柊の後ろでぐるぐる回っている。

柊もこれにはぐうの根も出ない。

顔を真っ青にして、一步も動けない。

その時、幼女がおかしなことを口にした。

「お主ら、わしが見えるんじゃない？」

これが、稲荷神の遣い魔、千代との出会い。

第一話・今日は最低最悪の厄日

5月の半ば。

青々とした緑の若葉は、二人の少年の上で揺れている。
遠くからはきやつきやと騒ぐ子供の声。

牛の鳴く声、村人の声。

全てが嘘みたいに明るくて、優しい。

「・・・・・・・・」

「ね、柊くん。今あの子なんて言ったの？」

八神神社別名「御稻荷神社」の境内で

二人の少年が目を丸くして立っている。

「聞こえなかったのか？ わしは同じ説明を二度するのが嫌いじゃ。
そこのお主、このちっこいのに言うてやれ」

その目の前には、高価そうな着物を纏って、ふわふわ浮いている不思議な少女。

自分も「ちっこいの」のくせに偉そうな態度をとっている。

「ち・・・ちっこいのって・・・ボクは君より年上だよ！」

「わしは平安の時代から生きとんのじゃ！」

懷から扇子をとりだすと、また偉そうにそれで自分を扇いだ。
実をいうとこの少女、この二人にしか見えないらしい。

「え・・・っと、麻貴、コイツ見えるな？」

「うん。見えるよ」

少女は二人のほうに向き直り、空中で胡坐をかいた。
目は赤い瞳がらんと輝き、恐ろしくもある。

「じゃ、自己紹介から。わしの名は・・・」

少女が自己紹介をしようとしたその時、柊が口を挟んだ。
少女はあからさまに嫌そうな顔をした。

「ちよっと待って！ 普通ここで自己紹介！？」

だいたい君おかしいだろ！平安時代から生きてるとか！浮いてるとか！」

持っていた扇子で、少女はバシーンと柊の頭を叩いた。
ある意味ハリセンで叩かれるより痛い。もの凄く痛い。

たまらなくなつて、柊は自分の頭を抱えてしゃがみこんだ。

「だから、今此処でそれを言おうとしているのに、お主が余計な口を挟むから

悪いのじゃ」

「だからってフツー扇子で思いつきり引つ叩くか・・・！？」

二人つて、会ったばかりなのに仲良しだな、と

麻貴は口には出さなかったが思った。

口になんて出してみろ。今その場で自分の命が絶えるぞ、と

麻貴はちよつとした恐怖感を覚えた。

「改まって自己紹介をする。わしの名は「千代」。神々の遣い魔だ。そのちつこいの！名は！？」

扇子を麻貴の鼻の頭まで突き出して

千代は叫んだ。

「水野麻貴・・・です」

「フン。女みたいな名前しやがって。で、そっちの馬鹿っぽいの名は？」

最低最悪な言葉をはいて、麻貴同様、柊にも扇子を突きつけた。

「つて・・・！あ？名前？柊！志摩宮柊！」

「一回言えば分かるわ。クソガキ」

また千代は、柊を一発殴った。

麻貴がおろおろして、柊に駆け寄る。

柊は今度は腹を押さえてぐあーと声を上げながらしゃがみこんだ。

「とにかく！俺たち学校行くから！お前の神様なんたらは放課後聞いてやるよ！」

「じゃーねー！」

おかしな少女からなんとか逃げ出した二人は、学校目指して一目散に駆け出した。

「ね、柊くん。あの子の話聞く気？」

「なわけねーだろ。子供の遊びだ。今日はとっと帰ってマンガ読みたいんだ」

「浮いてたのは？子供の遊びであんな事出来るかな？」

「この頃のカキは何仕出かすかわかんねーの」

二人は舗装されていない砂利道を

砂埃を立てながら全速力で走った。

今の二人の頭の中には、「遅刻」の二文字しかなかった。

その頃、一人取り残された千代は、そのままふよふよ浮いて二人の後を見つめていた。

学校の時計の針は7：55を指していた。

「まにあったーっ？」

「なんで疑問詞なんだよ。間に合ってるよ」

「まにあったー、じゃなくて提出プリントだしてくんない？」

ずざざざざつと後戻りをして、よく見ると、教室の前に

みつあみでメガネをかけている女の子が仁王立ちしていた。

「……おっす、相川……」

「おはよ。咲ちゃん」

不機嫌そうな顔をしていた少女は、急ににつこりと笑った。

そして、その場から動いたかと思うと、柊の腹に蹴りを食らわせた。ぐぎゃああーと奇声を上げ、柊はかるく30メートルは吹っ飛んだ。

「毎度毎度遅刻しおってボケどもが！」

その一言で、咲は右足を前に出した。

「おのれらのせい……」

その右足を軸に、麻貴の方へ向き、麻貴と視線を合わせる。

「わたしや毎回毎回センコーに怒られとんのじゃー!!」

麻貴の胸倉を掴むと、反対側の廊下に麻貴を投げ飛ばした。

いったいその華奢な体の何処に、そんなパワーがあるのだろう。

麻貴も「ヘルプー」と叫びながらべしやりと廊下に落ちた。

「毎度毎度凄いね。咲」

「これくらいトーゼンよ」

「咲に逆らったら殺されちゃうね」

「当然。ひねり潰すわ」

クラスの女子と笑いながら、咲は教室に入ろうとした。

その瞬間、視界に異様なものが映った。

赤衣着物をきて、赤い眼をして、浮いている。

「・・・・・・？」

「どーしたの？咲。センセ来ちゃうよ」

「あ・・ああゴメン。なんでもないの」

幻覚だ、少し疲れてるんだ。

そうやって自分に言い聞かせ、咲は廊下にへばりつき苦しんでいる

二人を無視して、教室に消えていった。

「今日は厄日だ・・・・・・」

「朝から二回も殴られちゃったね・・」

「たぶん三回だと思う」

そのとおり、今日は二人の運命が変わってしまった厄日なのだ。

第二話・真実はいつでも残酷

おもいつき蹴り飛ばされた柊と

おもいつき投げ飛ばされた麻貴は

二人同時に起き上がった。この場合、柊のほうが

長く廊下にへばりついていた事になる。という事は

柊のほうが長くみつともない姿をさらしていた訳である。

「みつあみメガネって・・・、清楚可憐な文学少女だろ・・・？」

「今の咲ちゃんじゃ似ても似つかないね。てゆーか反対だね」

ばふばふと自分の制服をはたく。

黒い制服なのにとこころ白っぽくなってしまっている。

外れたボタンをはめ直し、顔を上げたその先に

千代がいた。

「うわあああああああ！？」

「うきやあああああ！！」

「人を化け物扱いするなー！！ま、阿呆の人間からみたら化け物のか」

なぜか千代がいた。

浮いているし。

やっぱりコイツは人間じゃない。

「おいおい。なにでかい声で叫んでんだよー」

クラスの何人かが二人を笑った。

（・・・そっか、こいつら見えないのか・・・）

麻貴がみんなの笑いの的になっている間に

柊は千代に「いいか絶対厄介事はおこすな」

と念に念を押した。

「なんで来たんだよー」

昼休みの屋上。だれもいない。
かわりに此処は景色がいい。

「お前らが話の途中に駆け出すから追っかけてきたんじゃ」

「ねー、君ほんとなんなの？」

「だから！稲荷神の遣い魔って言っているだろうが！」
がっとうを開いて千代は叫んだ。

千代の迫力のあまりに、口から唾がとんだ。

見事、麻貴の目に直撃した。

「だから！その遣い魔！遣い魔って何！？」

神様のお傍にいるのは天使じゃないのか。

柊はなんとしても納得できない。

「そうか、お前らの脳味噌じゃ理解できんわな」

柊と麻貴にかかるいシヨツクを与えたところで

千代は自分の扇子を二人の目の前に差し出した。

それには、墨で書かれた文字と絵が、ぼんやりと浮かんでいた。

「世界には沢山の神々がいる。そのうちの一つが稲荷神じゃ。

此処に出ているのは中心的な五大神じゃ。ほれ、此処見てみい。

ちやぁんと載つとるじゃろ。このお方じゃ」

狐の面を被り、肩でもたれた髪は、後ろで二つに束ねてある。

天女に近い姿をしていた。

「で、稲荷神様のとなり。この方が水神様。こちらが炎神様。

それでこの方が荒神様。アラガミサマ あちらが光神様。コウジンサマ」

水神様は、髪の長い冷たい表情の長身の男。蓬萊の玉の枝、という

話に出てくる金・銀・瑠璃色の水を体に纏っている。

炎神様は、水神と対照的なバサバサとした髪で

赤い布の服を着ている。

荒神様は、顔が見えないフードコートみたいな着物を着ていて、

口元がにたぁと笑っている。

光神様は、菩薩様みたいな明るい笑顔の大男で、

お釈迦様が纏うような着物で身を包んでいる。

「ほー、すげーなあ……」

「女の神様は稲荷神様だけなんだね」

麻貴が思わず呟いたとき、千代が目を輝かせてずいっと近寄ってきた。

「そーなのだ！聞いて驚け！稲荷神様は今までずっと男ばかりだった五大神の中にはじめて女として入ったんだぞ！」

余談だが、千代の稲荷神様トークは優に一時間続いた。

「先生。柊くんと麻貴くんがいますーん」

こちらも余談だが、授業はとつくとつくに始まっていたのだ。教室はざわざわとざわついている。

「あー静かに。学級委員。二人を探してきて」

「（げっ……）はい、先生」

学級委員、という理由で教室から追い出されるように

二人を探すはめになった咲は、まっすぐ屋上にむかった。

（あのクソども……！！見つけたらぼっこぼこにしてやらあ！！）

そんなおっかない事を考えながら、咲の足取りは

確実に屋上に向かっていった。

そして、最後の階段を上りきったとき。

「……！！……」

朝見たあの少女が、二人と一緒にいた。

何事もないかのように話している。

「あ……ああ……！！」

「でもさ、俺たち、稲荷神と関係ないじゃん。もう解放してよ」

千代は目を剥いた。

「馬鹿いうな！お前たちは私が見えたという時点で

神々の守護者なのだ……！！」

二人は絶句した。
そして、それを聞いていた咲も。

第三話・ロリコン女の過去話

屋上は静寂だった。

驚きという、感情に包まれて。

「知らないから！俺絶対違うから！」

柊はめいいっぱい否定した。

なんだよ。稲荷神って。

名前からしてふざけてるし。

だいたいこんな事があっていいはずが無い。

「ボクも違うよー。きつと間違いだよ」

麻貴は笑いながら、困ったような顔をした。

「あー、ちなみにあれ、咲とかいう女もそうじゃ」

その言葉は咲の耳にはつきり届き

手足を震えさせるほどだった。

「嘘でしょ！」

なによそれ。わけが分からない。

扉から、咲は無意識に飛び出してしまっていた。

「え・・・いたの！？咲ちゃん」

麻貴の大声が、柊を遮る。

「悪いが嘘ではない」

「・・・。有り得ないわ。こんな、ダメな私が・・・」

頭がぐるぐる回って、状況が読み取れない。

「咲ちゃん？咲ちゃんがダメってどういう事？」

頭もいいし、責任感もある。

運動だってできるし、先生からも好かれてる。

そんな咲がダメなわけが無いのに。

「私・・・4月に転校してきたよね・・・」

雨が、降りそうだ。

毎日が、曇り空だった。
同級生は何でもできるのに、
私は何もできなくて。
目立たない私は、たくさん嫌がらせを受けた。
先生は私が居ないかのように扱った。
もう嫌だ。

今度の学校では失敗しないって
わざと明るく振舞って
嫌われない程度の暴力も振るった。
そしたらあっけなくクラスの中心に立てて
人間ってこんなもんなんだなあって。

「ね。その、さっきの話は嘘じゃないんでしょ？」
「まーな」

咲はぱああつと笑った。

（なんかおかしくない？）

（それはきつと、咲ちゃんの過去話が入ったからでしょ）

「私！やるわ！」

「ええええ！?!？」

二人はあわせて悲鳴を上げた。

咲は笑顔で続ける。

「私を必要としてくれてるんだもん！やらなきゃ！」

「じゃ・・・じゃあ頑張つてね」

逃げようとした麻貴の襟首を掴み、

麻貴はぎゃぴつと叫んだ。

「あんた達もやるの！こんなの人生の中で在りえないような奇跡よ
！」

奇跡というか、人生ぶち壊しである。

「それに・・・それにこの子とつても可愛いもの！」

そう叫ぶと咲は千代を抱きしめた。

千代はヘルプメッセージを送っていたが、あえて見てみぬふり。

「おい。お前大丈夫？そんな奴が可愛いなんて。

しかも、こんなチビだぜ。あ！もしかしてお前口・・・」

言い終わる前に咲からアップパーカットを喰らった。

放物線を描き、柊は飛んだ。

「ロリコンじゃない！！」

「まだ誰もロリコンだなんて言っただろ！」

「だって、この子ゴスロリ着せたら絶対似合うよ！」

「それがロリコンっつーんだボケ女ー！！」

よく分からないまま、柊と麻貴は、咲のせいで千代の仲間になる事になった。

第四話・八神神社の十代目

人生何もかもおしまいというのはこの事だろう。

『そーじゃ、柊。授業はどうした？』

千代の無責任な言葉で、三人ははつとわれに帰った。

咲が来てから優に15分は過ぎている。

『きゃああああ！先生に怒られる！』

『おめーらの所為だからな！ドチビとロリコン！』

柊は千代と咲から蹴りを喰らった。

『咲ちゃんはい訳できてボクらはむりだね』

麻貴の予感は大当たりし、

探しに言った咲は「探すのに手間取った」と大嘘をつき
柊と麻貴は仲良く説教を頂戴する羽目になった。

「くっそー。あのアホ教師め。散々説教しやがって」
帰る頃にはもう真っ暗で

田の淵でカエルがげこげこ鳴いていた。

「だね。それにしても咲ちゃん。待っててくれてありがとねっ」

麻貴が癒されるような笑顔で咲に笑いかけると

咲は顔を赤くした。

「べっ、別に・・・私の所為でもあるし・・・」

それに、千代だっているし・・・」

咲が顔を赤くして、言葉に困っている頃

柊と千代はずんずんとあぜ道を歩いていた。

向かっているのは、八神神社の本殿。

「此処から、わしを見る視線が感じ取れた。

守護者はぜえったい此処にいる！」

と千代が言い張るもんだから

柊は仕方なく行く羽目になったのだ。

此処は、あまり来たくなかったのだが・・・。

本殿は神社の裏側に大きく聳えている。

ここら一帯じゃ、この神社の本殿が一番大きいだろう。

「視線からして歳は14〜5歳。

大人びているようじゃがな」

柊は益々嫌な気分になった。

此処の本殿に、いい思い出は無い。

全くといっていいほど、無い。

だから入るのが嫌だったのだ。

「すいませーん。誰かいらっしやいませんか」

あいつだけは出てくるな。絶対に出てくるな。

出てきたら神社に飾ってる狐壊すぞ。

「はい」

げ。

柊の願いは叶わなかった。

奥から、髪の高い少年が着物をきて現れた。

「ん？」

少年は目を細めて柊を睨んだ。

「お前、柊か？」

「・・・そーだよ」

少年はにやつと笑った。

だからコイツは嫌なんだ。

「相も変わらぬアホヅラだな」

柊はムカツときたが抑えた。

千代が平然と少年を見つめる。

「しつかし久しぶりだな。お前が此処に来るのは。

あの時境内に祭ってある観音像の頭を落としたとき以来か？」

柊は完全にぶちぎれた。

「うるせええええー！俺だって来たくてきてんじやねえええええ！」

ああ、ム力つく！

だから会いたくなかつたんだ。

八神社十代目後継、ヤガミオンカイ八神音魁！

第五話・守護者の使命

カタン。

3人の目の前に湯気の立つ茶が置かれた。

「お前は・・麻貴か？久しぶりだな。全然変わってないな」

「そーあ？音魁くんもだよー」

二人はけたけた笑った。

くそう。音魁のやつめ。

麻貴には嫌がらせなんかしないのに。

つーかおかしすぎるだろ。名前。

「おめーに言われたかねーよ。柊」

ちつ。聞こえてやがった。

かたかたかたかた貧乏揺すりをする柊を横目で見ながら

千代はため息をついた。

「ところで麻貴。お前の隣の女の子。こんな子いたか？」

「あ！この子はね！転校生の咲ちゃんって言うてね・・」

柊はなんとも面白くない気分だった。

（おい。千代ー。さっさと用件済まそうぜー。

俺此処の空気吸うのヤなんだよ）

（空気なんて何処で吸っても同じじゃろーが。ボケ）

千代はあまりに柊がしつこいものだから

仕方なく本題に入ることにした。

「おい。そこの。そこの髪の毛長い巫女っぽい格好してる童」

「あ？俺のこと？」

「そう。お前の事。この馬鹿が五月蠅いから率直に言うぞ。

お前は神の守護者だ」

周りの空気が一気に重くなった。

音魁はめを丸くして呆けた。

「柊・お前まだカードゲームみたいなやつてんのか。成長しねー奴だな」

「んなわけねーだろーが！！だいたいこの年でカードゲームするよ
うな

お子様に見えるのか俺はあああ！！」

説明はずいぶんと長かったので以下略で済まさせてもらう。

「ふーん。なるほど。よく分からんが、わかった」
どっちだよ。

「じゃ、よろしく頼むぞ。守護者」

それでいいのかよ。

柊は気が遠くなりそうだった。

まさかこんな奴との因縁がこんな形で戻ってくるとは。

昔、柊と音魁と麻貴は親友以上の友達だった。

小学校も一緒だったし、いつも三人で遊んでいた。

それが、いきなり中学校に進級してから

「家の都合」

と義務教育中なのに学校に来なくなったし

二人とも遊ばなくなった。

麻貴は最初は辛かった。

気にしてないよ、と強がって影で泣きそうな顔をしていた。

柊は辛くもなかった。

でも、音魁の後姿を見ているうちに

自分がとつてもとつても小さな存在のようで

先先進んでいく音魁を見るのが

自分にプレッシャーを重ねているようで

だから会いたくなかったんだ。

なのに毎日神社に来てしまう。

未練？それは違うと思う。

神社に来たら三人の頃を思い出すのに
それを必死に忘れようとして

毎日祈る振りをした。

今よくよく考えれば完全に矛盾してる話だ。

「なあ」

音魁の声で我に返る。

咲が不思議そうな顔をして柊を覗き込む。

「守護者つーのはいいけどさ。何するの。何処で、誰が、何を？」
確かに。こんな肝心なことを知らないで俺たちは了承したのか。

「あ、それか、それはな……」

わしもよく知らんから、一度天界に来てもらうことにする」

一同が、マンガみたいにずっとこけた。

第六話・博打好きの美女神様

「じゃあ、いざ天界へれつつごー!」

おいおい、なんか平仮名になってるぞ。

千代の提案(？)で柊達は天界というわけの分からない場所へ連れて行かれる羽目になった。

「・・・腹減ってんのに・・・」

そう考えれば夕食を食べてないし

家にも帰ってない。

給食は完全に消化されて

胃の中はからっぽだ。

「あー、そうじゃ。一人一人の家に『泊まるから』みたいな電話入れといたからな」

なんつー勝手な奴だ。

でも柊が反論できるような空気じゃなかった。

クエスチョン・なぜ？

アンサー・みんな「さあいざ天界へれつつごー。何としてでも俺らは行くぜいやっほう!」

みたいな空気だったから。

柊の頭が痛くなった頃。

空間が、歪んだ。

「きゃー!」

足元に穴があいて、五人は一斉に落ちていく。

「おい!千代!何てめーだけ浮いてんだよ!ずりーぞ!」

「これがわしの力じゃからな」

「助けて助けてヘルプヘルプ!嫌いだけどピーマン食べるよ!多分

！」

「きゃあああああー！」

「つーかよ……」

「ふつー天界って上じゃねーのおお！！？？」

ごもつともである。音魁。

しかし一同は下へ真つ逆さまに落ちていった。

ストン。

それはあまりにあっけない音だった。

空間に音が飲み込まれるように響いた。

軽い不協和音かもしれない。

「わー綺麗！」

一面が水に囲まれたようなユラユラした神秘的な空間に
竹林と砂利道が素敵に飾られてある。

「此処が天界？」

心が落ち着くような蒼い空間。

異空間ってやつかな？

「此処は天界への道「天路」^{テノロ}じゃ」

千代が先立って歩き（飛び）だしたので

一同は千代の後を追った。

一時間後

「おい！いつまでこうしてあるきゃぁいいんだー！

もう城は目の前じゃねーかぁ！」

柊が反論するのも無理は無い。

かれこれ小一時間。

四人（五人？）は歩いている。

城は目の前なのに。

「うるっさいやつじゃのー。仕方が無い。行くかの」

半ば呆れ顔の千代は、懷から石を取り出した。

マリンブルーの水晶玉。

そして、叫んだ。

「蒼く輝く漣よ！今風を我が身に宛がい風魔を呼び寄せろ！」

「漣」とは水晶の名前らしい。

風が皆の体に巻きつき、空に飛びあげた。

地面から足が離れる恐ろしさに、麻貴は少しすくんだ。

「飛べ！」

千代の言葉が引き金で、風は城に向かって飛んだ。

毎分100kmはあるんじゃないだろうか。

あ！っと言う間に城門が目の前だった。

気づけば千代も居る。

「千代。あなた一体・・・」

咲が問いかけようとしたとき、また体が浮いた。

「左の神所へ！」

風は千代の命令に答え

左へ曲がり、御殿の前で皆をおろした。

「ご苦労じゃった」

『これくらい大丈夫ですわよ。んふふ。バァーイ、子猫ちゃん』

風が喋った。そして消えた。

千代がかなり嫌そうな顔をした。

「し・・・喋った」

「すごい」

御殿の中は、高価そうな絨毯が床を見せないように敷き詰められて

いた。

土足で歩いている柊たちが愚民に見える。

「稲荷神様ー」

千代がベットに呼びかける。

おいおい、神様ってベットに寝るのか？

「どんな人かなっ」

「そりゃ、千代が見せてくれたあの扇子にあった感じの・・・」

「そんなのあったのか！？俺みてねーぞ！」

音魁の言葉に、柊はちよつと勝ち誇った気分になった。

「えーつと・・・千代？お帰りー。案外早かったねー」

「そうですか？あー凜様、またお酒飲まれましたね？」

「あーばれちゃったー。えへへ」

四人が硬直した。

神様って酒飲むんだ・・・

「守護者見つけましたよ」

「ありがと」

稲荷神もとい凜は細く白い足をベットから出して

床に着地した。

狐の面は被ってない。

冷たげで、きりつとした目。

紅く膨らんでいる唇。

美女だった。

「いらつしゃい。守護者。あたしが稲荷神こと凜よ。

趣味は博打。どーぞヨロシクね。」

神様へのイメージが、音を立てて崩れたのが分かった。
神様って、博打するんだ・・・

第七話・咲の能力

御殿の中は静かだった。

凜と千代以外は。

「凜様ー！また仕事サボってましたねー！？書類が溜まってる！」
千代の手の中には、溢れ出しそうなほどの書類が積まれていた。
ちなみに神様の仕事は、人間を見ることらしい。
何の意味があるのかよく分からないが。

「ちよつとくらいイイじゃなあい。しかも博打で儲けたのよ！
ほら見てよお。凄いでしょつ。えへへ」

こちらにも溢れ出しそうなほどの札束が、凜の手の中にあつた。
子供みtainな無邪気な笑顔で笑う。

「そうですねゝすごいですねゝ。でもまずは仕事でしょゝ？」

「はい……。そうですね……。」

おそろべし。千代。

凜は渋々デスクワークを始めようとした。

「あ！この者たちに力を与えるのが先です！」

千代が思い出したように叫んだ。

俺たちはその程度の存在か？

帰るぞ、コラ。

「え？そーなの？メンドクサイなゝ。あれ結構労力かかる……。」

「つべこべ言わずにやれ」

「はい……。」

おい、仮にも神様じゃないのか？
上司じゃないのか？

それでよくクビにならないもんだ。

「じゃ、凜ちゃんいつきまゝす」

精神年齢も子供か。

見た目はいいかんじのお姉さんなのに。

「じゃあまず女の子から！」

そう言つて、咲を指差した。

反動で、狐の尻尾みたいな髪が揺れた。

「名前は？」

「咲・・・です」

「可愛い名前ねっ。じゃ、そのみつあみを解いて」

なんか訳の分からない事を言い出した。

「みつあみ解いてなんの意味があるんだよ」

呟いた柊に、千代の蹴りが直撃した。

ぎゃあああと叫ぶ柊。

「なな何しやがる！」

「今の発言は凜様への侮辱だ！私が許さん！」

「オメーに言われたかねーんだよ！」

ぎゃあぎゃあと呼ぶ二人をよそに

リョクジュノギンキ
力授之儀式は進められた。

「あの・・・どうしても髪とらなきゃダメですか？

私、髪の事でいじめられた事あつて・・・だから」

「つべこべ言わずに取りなさいよ」

さすが。この部下あつての上司だ。

咲は仕方なく、髪を解いた。

みつあみが消えて、ふわふわとカーブを描いた髪が、咲の腰のあた

りで

揺れる。

「綺麗じゃん。な、麻貴」

「うん！とっても素敵だよ！咲ちゃんっ」

咲は驚いていたが、嬉しそうな笑顔をみせた。

「じゃ、いくぞ」

凜は咲の髪を掴んだ。

そしてその髪にかかるキスをする。

「!？」

すると、髪が青白く光を放ち、下から空気圧がふわっと押し寄せた。

「ひゃあ！」

光と風は、消えた。

咲はぽかんと口を開けたままだ。

「はい完成！おめでとーう。咲！」

何が完成なのかよく分からないまま

咲はお礼として頭を下げた。

「ああ、そうだ。そのまま『神の矛先』って叫んでみな」

神の矛先？

神と髪を合わせたギャグか？と

柊はしらけた。

予想は外れた。ギャグなんかじゃなかった。

「神の矛先！」

ごあつと音を立てて、咲の髪が揺れると

髪がいろんな箇所で一纏まりになり、

床に穴を開けるような勢いで刺しこんだ。

その風圧で、書類や布団が宙を舞った。

窓に飾ってある飾り物も、りんりんと音を立ててくるくと回る。

やがて、風は止んだ。

「さ・・咲ちゃんすごおい・・・」

「これが、咲の能力。髪の矛先じゃ」

おい、字違うぞ。

神の矛先だろ。

こうして、咲は攻撃能力を手に入れた。

第八話・マンガでもありえない!?

「はい。次の方」

ここは病院か？

「凜様。次はコイツです」

そういうと、千代は麻貴を蹴った。

わぁっと叫んで、麻貴が前へつんのめる。

「痛い・・・酷いなあ」

ぶつぶつ文句をいう麻貴をよそに

千代はふよふよ飛んで、書類を片付けに行った。

「はい、君、お名前は？」

完全に病院になっちゃったよ。

「ま・・・麻貴です」

「麻貴、ね。麻貴、これ持ってみなさい」

ちゃらつと音をたてて麻貴の目の前に現れたのは

龍が彫られている長いチェーンだった。

いがいとセンスがいい。

「それ、あたしの力込めといたから。「チェーンリング」って

叫びながら手を前に振ってみ？」

こくりと頷くと、そのまま千代めがけて麻貴は手を振った。

「チェーンリングう！」

声が響いたとたん、彫り物の龍が目を紅く光らせ

がばつと口をあけて千代に突進した。

これには柊も音魁も驚いた。

「わわわわ!!」

慌てて千代がよける。

あたればいいのに、と柊はちょっと思った。

「なにをする!この童!」

「ゴメン・・・」

どうやら当てる気は無かったようだ。

麻貴が攻撃をする気が無くなると、龍も元に戻った。

「忠誠心あるのよ。これ。」

もう少ししたら、喋ってくれるかもね」

ふわあっと、凜はあくびをした。

かなりだらしない。

「今日はもう疲れちゃったからおっしまーい！」

という事で、俺らは明日へ後回しにされた。

腐れ神め。

来たときは明るかった天界も

夕日が落ちて、真っ暗になった。

「お腹すいたー。ごはんーごはんー」

どこぞの子供か。おのれは。

凜があまりにも夕食を急ぎ立てるものだから

千代は凜をひと睨みした。

「あ、そだ。みんな呼んじゃおっと」

おもむろに、凜は部屋にあった電話つばいものに手をかけた。

「あの、これ電話ですか？」

咲がおそるおそる聞く。

「そーよ。受話器は下界と同じ。でもこの電話は魔法で作ったの」

「すごい。凜様すごい」

わあっと歓声を上げる麻貴。

凜は照れ笑いした。

「ありがと。あと、凜様じゃなくて凜でいいからね」

部屋が騒がしくなった。

凜はがちやがちやと電話をかけまくるし、

咲と麻貴はその傍らで電話を見守っている。

「電話が面白いのか？あいつら。ガキだな」

「なわけねーだろ。まあ、ガキだけだな」

はあつと溜息をはいたのは柊と、音魁。
この二人、似たもの同士である。

「おじゃましまーす」

「こんばんわつ。凜様！」

なんか声が増えたぞ。

おかしくないか。

「相変わらずだな・・・」

「おつす！凜！」

次から次へとわらわら声が増えていく。

おいおいおい、なんか人数も増えたぞ。

「お・・・おい、千代。あれ・・・」

「ああ、あれは他の五大神の方々じゃ」

・・・・・・

なんかかんやで、四人は、しよっぱなから五大神と鉢合せになった。
つか、マンガでもありえねーだろ、こんな事。

第九話・何かが足りない

五大神

ゴタイヤオヨロスノウジガミ

正式名を、五大八百万之氏神

はつきり言つて、めっちゃくつちやな名前。

どやどやと音がして、たくさんの人間（？）が部屋に入ってくる。

「凜！おまえの守護者見つかったのか！

よかったなあ！」

千代が見せてくれた絵では、確か炎神だったような人が、凜に笑いかける。

「おかげさまでえ。この子達、技覚えるのも早くて助かるわあっ」
完全にババア化している。

柊が呆れたような目でみると、凜の横にいた千代がぎろつと睨んできた。

この矛盾女！

「そーだ！みんなこの子達に自己紹介してあげてっ」
ぱんつと手を叩き、凜が飛び跳ねる。

よく見れば、神様達の隣に、一人ひとり護衛つぽいのがいる。

「千代、あの神様達の隣に居るのはなんだ？」

柊が聞くより早く、音魁が千代に呼びかけた。

みんなそれぞれで、男も居れば女もいる。

幼女つぽい体型の人は一人も居ない。

「あ、あれは・・・まあわしと凜様みたいな上下関係の事じゃ」
お前みたいな上下関係成立しねーよ。

「おい小僧ども」

「！どうわああああ！？」

突然の声に柊と音魁が同時に叫ぶ。

咲と麻貴は、まだ電話に夢中だ。
ガキどもめ。

柊たちの目の前には、黒髪長髪、上半身が裸で
下半身にジーンズに近い素材のズボンを履いている
水を体に纏った男がいた。

「俺は水神の俺^{アツ}。こつちが秦^シ」

俺は、隣に居たサラサラヘアの少年を指差す。

慌ててぺこりと、秦は頭を垂れた。

「あ・・・どうも・・・えっと、俺が柊で

こつちのすかしたロン毛が音魁」

ぽかっと、音魁が柊の頭を殴る。

（つてーなあ！なにすんだよ！）

（誰がすかしたキモロン毛だ！）

（そこまで言つてねーだろ！）

「お前らには、何かが足りない・・・」

「え？」

一瞬、言葉が聞き取れなかった。

なんて言つたの？

しかし、俺はくるりと向きを変え

部屋から出て行こうとした。

「えー。俺帰っちゃうのお？もうちょつといてよう」

「うるさい。こんな酒臭い部屋に小一時間もいられるか」

俺はそう吐き捨てると、秦を従えて

部屋から出て行ってしまった。

「ふーんだ！お前なんか猥褻物陳列罪で訴えられてしまえっ！べら
ぼーめ！」

凜様は意外と暴言はきである。

てゆうか、俺の最後の言葉は何だったんだろう・・・？

第十話・物好きな炎神様

凜が俺にむかって散々わいめいた後、
やっと自己紹介が始まった。

そのころには凜は完全に酔いつぶれて
ばたんきゅー、と倒れたかと思うと

「気持ち悪いいゝ」と叫んで
厠に逃げ込んでしまった。

「じゃ、仕方ないので自己紹介でもしてやってください」
めっちゃ偉そうな態度で、千代が皆に言った。

「はいはい。俺からやるよ」
赤髪の男が立ち上がった。

隣にいた少女と一緒に立ち上がる。
少女のような人はみんな、肩が出ている薄い服と

肩と手を除いた腕をかくす布をはめ、
手には手甲をつけている。

ズボンらしきもので下半身を覆い、
足の指が出ているサンダルっぽい靴を履いている。

ちなみに、秦もそうだった。
「俺は炎神の湾。^{ワン}こっちが蘭^{ラン}」

にかつと、湾は笑った、フレンドリーである。
「俺は蘭だ。よろしく」

「よろしく。女の子が俺だなんて、珍しいねっ」
麻貴がにこつと笑って手を差し伸べた。

その瞬間、蘭は麻貴の手をばしつとはたいた。
「!？」

「俺は男だ！女じゃない！」
いやいや、どう見ても女じゃん！

ポニーテルだし、目はくりっとしてて完全に女だし。

「どう考えたって女だろ・・・？」

柊が呟くと蘭は泣きそうな顔になって、うつむいた。その瞬間。

「う・・・う・・・うわああああーん!!」

大声を上げて、蘭はびえびえと泣き出した。

顔に手を当てて、目を擦っているところを見るとやっぱ女だ。

「ふええええーっ。お・・・俺は、男だもんっ」

この期に及んでまだ言うか。

「はいはい、泣くな泣くな」

ぽんぽんと、優しく湾が蘭の頭を撫でる。

ひえつくひえつくとしゃくり上げながら、蘭は頷く。

「許してやってくれな。こいつ、性同一障害ってやつなんだ」

四人の耳元で、小声で呟く。

性同一障害とは、

体は男なのに心は女

体は女なのに心は男

みたいなやつだ。多分。

「でも、炎神様も物好きだな。こんなめんどげなやつを・・・ほげが

！」

音魁が失礼な事を悪気なく言い出したので

柊が音魁を拳で殴った。

こいつ、見た目と違ってすっごく失礼な奴である。

しかし、湾ははははと笑った。

「こういう奴のほうが面白いじゃんか」

抜けてるんだか、天然なんだか、ちゃんと考えてるんだか・・・

第十一話・さらわれた姫君

蘭がまだ啜り泣いている時に
部屋に、一人女が入ってきた。

まさかコイツも性同一障害とかいうんじゃないだろうな・

「荒神様の代理。蔭インでございます」

無駄に長い髪をひらりと靡かせ

真紅の眼を、柊たちへ向けた。

「斬ザン様は気乗りしないという事で

こちらに参られませんでした」

こつこつと足を戸を響かせ、柊たちの方へ向かう。

「柊」

そう呟いて、柊を指差した。

「音魁」

また同じように

「麻貴、咲」

それぞれを指差した。

「合っていますか？」

こくこくと、咲が頷く。

「では・・・私はこれで」

ひゅうつと風の音がしたかと思うと、

蔭は其処からいなくなっていた。

千代は出て行こうとする蔭をひき止めるため
廊下で、蔭の前に立ちふさがった。

というか、目の前に浮いた。

「どうしたの？千代」

「どこかおかしいぞ。蔭。王の姫君様、いらっしゃるか？」
そう問うと、蔭は悲しそうに眼を伏せた。

瞳には、涙が滲み、潤んでいる。

「なにがあつた？言つてみい」

「姫様は……」

長い廊下からは、声一つ聞こえなくなつた。

「じゃー、最後は俺だな」

お釈迦様の格好をした大男が立ち上がる。

傍にいた少年も、一緒に。

「俺は光神の満！こっちは……」

「煩です。よろしくですっ」

愛嬌のある顔が、にこーつと笑う。

麻貴がにこーつと笑い返すと

照れ隠しなのか、その白い髪をちよつと引つ張つた。

「何みんなで和んでんのよおお！」

その場を裂く、嫌な声がした。

なにもこんな和やかムードのときに戻つてこなくてもいいだろ。

「り・・凜。大丈夫か」

湾が話しかける。蘭が、いない千代の代わりに、凜を支えようとした。

「大丈夫な分けないでしょーっ！きめた！もう一切お酒は飲まないっ」

無理無理。そういう奴に限つて無理なんだよ。

心の声が聞こえたのか、凜は柵をギロリと睨んで酒瓶を投げつけてきた。

「わー！」

「つとー！」

「きゃあー！」

「ひゃあー！」

「きいーっ！ムカツクううう！当たんじゃないー！」
がっしやーんと音を立てて酒瓶が壊れる。

間一髪で、四人は其処から逃げ出した。

はは・・・と灣が苦笑いをする。

「あー・・・ああなるともう手がつけられないんだった。

じゃ、俺帰るから！後はがんばれよ！柊とその仲間達！」

ネーミングセンス悪！！

つーかこの状況で助けないってどーよ！？

おい！とかなんとか言ってる間に満も逃げちゃったし！？

どーすんの！？子供助けろよ！

「きーっ！イライラす・・・凜様！」

ばたんと、千代が部屋に飛び込んできた。

そのおかげで凜の一方的な攻撃は止んだ。

ナイス！千代！

と、その場にいたみんなが思っただろう。

「凜様・・・！姫君が・・・小夜様^{サヨ}が浚われたって、どう言う事ですか！？」

姫君？

姫君って、プリンセスの事？

「しかも、冥堂^{ミョウドウ}に浚われただなんて・・・」

おーい、俺たち置いて話し進めないでください。

つーか、めっちゃやばそうな話なんですけど！？

第十二話・二人目の姫君

今まで赤かった凜の顔が、突然青ざめた。

「どうしてそれをつ……？」

「今さつき蔭から聞きましたっ！なんでもっと早く……」
柊は苦しくなった。

肉体的にじゃないよ、精神的に。

そして、やりきれなくなつて、叫んだ。

「あああー！もーっ！だいたい姫様つてなんだよ！？
俺らも守護者だろ！？それくらい教えるよ！」

凜と千代は二人顔を見合わせて、そしてから向き直った。

「ふん。童が。大層な口を利きおつて」

「……いいわ。全部話すから」

手元にあつたマッチに火をつけ、行燈に灯す。

煌びやかな部屋に、不釣りあいな質素な行燈。

揺ら揺らと、炎が揺らめいた。

「破邪」

一言呟き、凜は行燈に手を掲げる。

日は落ちた。

月が、あがつてきて、ちょうど真上からそれた頃。

「庵様。来てます。中体が六つ。残りは魑魅魍魎です」

それまで規則正しい寝息を立てていた庵が

「わかつてる」

と言い放ち、ベットから下りた。

秦が、がらがらと音を立て窓を開ける。

月明かりに照らされて、何かが見える。

それは、まごうことなき、妖だった。

「フン」

俺は鼻で笑うと、手を空に掲げた。

「オア」

『わかっていますよ。主』

その手を、もつと先へ突き出す。

「そう、全ては無にかえる運命。

水に溶けて消え去れ。醜い妖どもよ」

ふっと呟くと、俺の体に巻きついていていた水が

俺の手を伝い、空へと放たれた。

もの凄いい速さで飛んでいき

妖どもを無に帰した。

「処罰」

隣にいた秦が叫ぶ。

手甲から、花びらが舞い、それはやがて消えた。

「終わりました」

「せっかくの安眠を邪魔しやがって。

俺は寝る。今度起こしてみろ。お前を真っ二つにしてやる」

「そういうのは妖に言うてください」

天界には、その上に王家というものがあつて

我々神々は、それを守るために作られた組織。

人間を観る、というのは仮の姿で

本当は、王家のためだけに存在するのだ。

「なのに、わしらは・・・それを守りきれなかった。

わしが、下界へ行く前から気づいておれば・・・！」

自暴自棄になっっている千代を、凜は

そつと抱きしめる。

「あなたの所為じゃないわ。あなたは自分を責めすぎ。

疲れているのよ。おやすみなさいな」

こくん、と小さく頷くと、

千代はおとなしくベットに向かった。

咲が、ふらふらと歩く千代を見つめる。

「ねえ、凜。気になっていたのだけれど」

目線を逸らさずに、咲が問う。

肯定するかのように、麻貴が頷く。

「みんな、名前の最後に「ん」がついていたでしょ。

でも、千代だけは付いていないわ。何故なの？」

凜は、キセルを口にくわえ、

マツチで火をつけたまま、応えた。

「あたし達は五大神になった後、名をそれぞれ貰うのよ」

ふーっと、キセルから吸い込んだ煙を吐き出す。

それは行燈の周りを囲み、やがて消え去った。

「でも、王家の者は、一度貰った名を変えてはいけない」

音魁が、はっとした顔で、凜を見る。

「じゃあまさか……」

「そう

千代は王家の姫様なの。

しかも、一番高い値をもっているわ」

第十三話・始まり

凜は、また煙を吸い込み、吐き出した。

「王家には、二人子供がいたの。それが千代と小夜様。でも、主の考えでは、子供が二人生まれるのはいけないって思い込んでて

後に生まれた千代を、あたしたちに預けたの」

現に、王家に子供が二人生まれることは天変地異が起こるくらい珍しいことらしい。

それでか、千代は六歳の頃のまま、体が全く成長しないのだ。

「あ、これ千代には内緒よっ！王家の人達がおしえないでえゝって泣いて頼んで来るんだもんっ。おもしろかったあ」

けたけたと凜は笑った。

性格最悪だよ。この女。

その時、他の部屋から、地響きがした。

「わっ！？」

「きゃあっ！」

咲が耳を押さえて、辺りを見回す。

「ああ、アレは妖魔よ。戦ってんのは・・・庵かな？

あいつ寝起きとおっても悪いからねえ」

地響きは、はっと止んだ。

その瞬間、麻貴が窓を開けて、周囲を確認する。

柊も麻貴の後ろから窓の外を覗き込む。

花びらが舞っていたのと、

水が妖を包んでいた。

「水・・・？」

「水？やっぱ庵かあ！」

ぼん、と叩いてキセルの中に詰まっていた灰を落とした。
そして、だらしなくくびを一つした。

「じゃーあたし寝るからー。柊と音魁の力授之儀式は明日
早めにするから」

ぼりぼりと首筋をかきながら

一括りに結っている髪を外しながら凜は言った。

「おい！俺ら何処で寝るんだよーっ！」

「・・・ソファーで良いじゃん。ソファーで」

「来客に対してその態度はおかしいだろ！」

「なによ。文句あるつての？じゃあ床で寝なさいよ！床！
それが嫌なら・・・ぐう・・・」

ぶちん、と柊がぎれた。

「途中で寝てんじゃねえー！！！！！」

結局、四人は四つあったソファで、寝ることになった。

ちなみに、寝相の悪い柊は何度か落ちた。

ちゅん。ちゅん。

スズメが鳴いている。

ああ、朝か。

学校行かなきゃ。

あれ？なんで俺制服のまま寝てんの？

風呂は？風呂に入った記憶がない。

めし・・・はなんか豪華だったような・・・
ん？なんか聞こえるぞ。

起きろつて？無理無理。こんな眠いのに。

あ、でも学校行かなきゃ。

今日は体育でマラソンがあつたよーな・・・

「おきろおー！！柊いいーっ！！！」

びんびんと耳に響く声が、朝の静けさを裂いた。
その犯人は、咲だった。

「あ・・相川？なんでいんの？俺ん家だぜ？
ありゃ、俺ん家こんなに広かったつけ？」

はぁーと、咲がため息をつく。

隣で音魁が笑うのをこらえている。

そのまた隣で、麻貴が「おっはよーっ」と言っている。

「昨日のこと、覚えてないの？」

ぼけーっと頭を回すと、やつと思い出した。

そっか。ここは天界だ！

「っーか相川。お前変わった服きてんな」

咲ははっと顔を赤らめ、両腕を体の前に持ってきた。

昨日着ていた制服はいずこへ。

上半身の服は秦や蔭が来ていたのと同じ。

下半身は短いズボンを履いていた。

膝はもちろんのこと、太股も半分くらい出ている。

「らっ・・・蘭ちゃんに作ってもらったの！」

これをか？この洋服をか？

あいつやっぱ女じゃねーか。

「はやく起きてよ柊くんっ！柊くんも着替えたほうが良いよっ！」

にこやかに笑いながら、麻貴が机の上を示す。

そこには、キチンと折りたたまれた服が

「柊用」と書いた透明の袋に入れられていた。

「お前と俺は今日力をもらうんだろ。」

はやく着替えとけよ」

くすくす笑いながら、音魁がソファにもたれかける。

かーっ！やっぱム力つくっっ！！

上半身を起こすと、鏡台の前に

口に髪留めのゴムをくわえた凜が鏡を睨んでいた。

何度も何度もやり直している。

さらさらの髪が揺れるのをちょっと見とれて見ていたとき。

「何やっとなじゃ」

上から千代が降ってきた。

「ぐぎゃっ！」

「凜様を見ていたのか？ いやあ、何度見ても髪を整えているときは惚れ惚れするくらい素敵じゃなっ。そうじゃろ？ ん？ いうてみい」

けっけっけと笑って、千代が飛んでいった。

うるさいっ！ と怒鳴ってやろうかと思ったがやめた。

「さあ！ 飯食ったら今日もやるぞおーっ！」

凜がきやーっと叫んだ。

始まりを示すように。

第十四話・狐のお面

今日はすべての始まり
そしてすべての終わり

「あ、千代。私の漣、返してよ」

慌てふためいたように、千代の顔が青ざめる。

「ももも申し訳ございません！昨日お返ししようと思っていたのに
っ」

「いいわよ別にい」

両手を床に着き、必死で謝る千代を横目に
凜は空中に手を伸ばした。

「もどつておいでえー」

すると、ひゅるるるるつと音がして、凜の手に
風が巻きついた。

どうやら、昨日千代が使っていたあの風は
凜のものだったらしい。

『えー。もう終わりい？もつと千代といたかったなーあ』

「あつちは嫌がってたけどね」

けつと息を吐きながら、凜は自分の唇に
紅を差した。

薄い唇がほんのり紅くなった。

そしてそのまま狐の面を被る。

狐の面はがりがりと思議な音を立てて
凜の顔に密着した。

あれで息が出来るのだろうか。

「じゃ、儀式を始めようか」

声が重く変わった。

いつものちゃらちゃらしている凜とは違う

大人びた声。

咲や麻貴の時はこんなんじゃないのに。

「あんだ達二人の力は計り知れないからね。一応こっちも本気でいくから」

そう微笑すると、傍にあつた金箱から

扇子を取り出した。

模様は鶴、そして四季折々の花々。

「我稻荷之神也。風よ。木霊せよ。力を授けよ……」

ぶつぶつと天空に向かって呟く。

すると、部屋の隅から天井から、揺らめいた狐が

するすると現れた。

その数およそ数千。

四人はしばらくそれに見入ったが、千代だけはデスクワークをしていた。

そして、狐は舞い始めた。

お酒を飲んでどんちゃん、とかいう洒落たものではなく

ただ、ひたすら、幻想に見入るように

狐達は天に向かって舞い始めた。

「この者に力を分け与えよ！」

狐の舞にあわせ、凜は手を空に差し出し詠唱した。

この詠唱は、神が上の者への敬意を示すために

省かずに言うらしい。

ふぁつと風が舞った。

扇子が凜の手元を離れ、音魁へぶつけられた。

相当痛かったのか、声にならない声を押し殺している。

「……っ!!」

部屋の中は穏やかになった。

「それがあんだの力よ。音魁」

音魁が黙ったまま頷く。

黒い髪が顔にかかったが

払おうともせずに扇子を見ている。

「なあ、凜」

「なに？音魁」

「これ、どうやって使うんだ」

凜の肩ががくりと落ちた。

目線を逸らさないまま、音魁は聞いた。

「いま、頭の中に変な言葉流れてない？

ほら・・・え」と・・・なんつーのかな・・・

聞いた事の無いってゆーか、ちよつとカツコイ感じてゆーか・・・

」

説明がめちゃくちゃだ。

「なんか聴こえる。遠くから、何かが・・・」

「でしょでしょ。それよ！そのうち覚えるから

それを言いながら扇子を閉じたりー開いたりーそれで叩いたりー。

実を言うとなたしも知らないんだよねえー。

そんな道具はじめて見たしさあー。

ま、そのうち分かるよ」

なんとも頼りない神様である。

千代が頼杖を付いて溜息をしているのが見えた。

「なによ千代。分からないものは仕方ないでしょ」

矛先が自分に突きつけられた事に驚き

「いいいいいい私はなにも言っておりませんよっ」

千代はパニックって焦っていた。

「じゃあ、次。本題＋ダークホース！行きますか」
言葉はおかしいのに、不思議な空気が漂う。

柊の番が、来た。

第十五話・消え失せた力

まだ幼い感じの風が

凜の足元に出来た。

凜がすうーっと息を吸うと、それにつられて

風が少しずつ大きくなっていく。

そして、風は消えた。

その瞬間、凜の額から赤黒い血が流れ落ちた。

毒々しいほどのそれは、凜の頬を伝い

床にぱたぱたと音もなく垂れた。

「凜様！」

悲鳴にならないような悲鳴を上げて、

千代が凜の元へ駆け寄る。

「大丈夫。だってこれが定めなんだもん」

息を切らしながら、凜は笑って見せた。

血に混じって落ちる、透き通った涙が

千代をますます不安にさせた。

柊は、それをただ見守るしかなかった。

「柊・・・」

声をかけられてびくつと体が跳ねる。

何故か、怖い。

「あんたの・・・力が・・・開花したはずよ」

確かに。

自分の周りにだけ、風があるように

着物の裾がはたはたと揺れる。

昔の着物はやけに裾がながい。

「あたしは、あんたが現れるまでの器だったの。

力を封じ込めておくためのね・・・」

柊は、瞳孔が開いたのが自分でも分かった。

手が震える。

凜は、俺の力を封じ込めるための器だった……？

「そんな馬鹿な話があったたまるかよ！」

自分でも驚くほどの大声だった。

でも、構わず叫ぶ。

「そんなんなら……」

俺が現れないほうが良かったじゃないか！

そしたら、凜は今までどおりで傷つかなくてすむし

千代だって不安にならなくてすんだじゃねえか！」

今すぐ千代に掴みかかって

なんで俺を呼んだ、と問いただしそうになった。

でも、それができなかったのは

麻貴が、柊の腕を強く握っていたからだ。

だめだよ……だめだよ……と

必死で柊に訴えていたからだ。

「それはちよつと違うのよ。柊」

はつと柊が顔を上げる。

暖かい眼差しが、柊を見ていた。

狐の面は、消えている。

「あたしは柊がこなければ遅かれ早かれ死んでいたわ。

この力を封じ込めておくには限界がある。

あたしの身体は、もって一年だった」

そこで凜は一息ついた。

「でも、柊が来てくれた。

正確に言うとか千代が見つけてきてくれた、かな。

だからあたしは、後遺症があっても、

これから生きていけるのよ……」

そう言い終わった時、凜の体がかくりと傾き

床にどさりと倒れた。

額から出ているおびただしいほどの鮮血が床を汚した。

「凜様——————!!!!」

千代の悲鳴が、今度ははつきりと木霊した。

何時の間にか、朝だった空が夜に変わったように

凜の額に巻かれた白い包帯は、赤黒く変色していた。

一向に、凜は目を覚まそうとしない。

いたたまれなくなった柊は、部屋から出てバルコニーにいた。

遙か下のほうでは、雲が漂っている。

そしてそのさらに下には、日本列島がくつきりと映っていた。
帰りたい。

何も無かったかのように。

此処からいなくなりたい。

何故凜は俺の力の器になったのだろうか。

一生現れないかもしれない、俺の。

俺がいなければよかったのに。

俺がこの世界に存在しなければよかったのに。

俺が・・・

「なーに^{ツラ}しけた面しとんのじゃ」

いきなり降ってきた声に導かれるように

柊は振り返った。

泣きはらした千代が浮いていた。

千代が動きたび頭の簪が右へ左へしゃらしゃら音をたてて揺れる。

「凜様の力は無くなった。今度はお前が、頑張らなければいけないのじゃ」

紅い目はもつと赤く腫れて、それを擦るたびもつと赤くなる。

「・・・なあ、千代。俺なんで、存在してんのかなあ・・・」

泣きたい気持ちをぐつとこらえて、千代に言う。

ほんとは今すぐ泣きたいのだけれど

恥ずかしいのと、情けないのが入り混じって
なんとか堪えていた。

「俺がいなきゃ、凜だって、こんな思いしないんだぜ？」
そう、俺さえいなきゃ。

すべてうまくいったかもしれない。

「馬鹿！」

ばしん

乾いた音が響いた。

それは、千代が柊の頬を叩いた音だった。
驚きを隠せない柊の頬を、もう一発叩いた。

「馬鹿ー！ーっ！」

千代の気のおさまるまで、柊は叩かれてやった。

「そんな事言っ！」

自分がいなきゃよかった、なんて言っ！

「あーあ！女の子泣かしちゃったあー！柊サイテー」

その声を辿ると、咲、麻貴、音魁が窓にもたれかかっていた。
そして咲の言った事をよく考えて千代を見ると
うえっくうえっくと泣いていた。

「え！？あ・・あの・・千代？おい・・わ・・悪かったよ」

「柊くん。千代ちゃんね、さっきから元気がなかった

柊くんをいつちばん心配してたんだよ」

ちよっぴり泣きそうな顔で麻貴が笑う。

「で、一番柊に期待してたのも、千代なんじゃねーの？」
さめた顔で、音魁が呟く。

「だからお前は、それに応えてやれよ。凜の分も」

その言葉に合わせて、千代はこくこくと頷いた。

千代がこんなに疼を思っていたのには、訳があった。

第十六話・死ねない少女・千代の過去

遙か昔の平安時代に

千代は生まれた。

千代が住んでいたのは都から外れた小さな村。

そこでは、儀式が行われていた。

雨の降らない年は、小さな少女を、神の生贄に捧げる。

「燦^{サン}！待ってよっ」

この時、千代は六歳。

幼馴染に、燦という男友達がいた。

「千代が遅いんだよっ！」

「なんですつてえ！？」

二人はとても仲良しだった。

いつも一緒。

運命が二人を突き放すまでは。

ある日、千代が家へ帰ると、家族全員が泣いていた。
どうしたのか、と千代は不審に思い

「どうしたの？みんな」

すると、祖母の手には大きな鎌が握られていた。

千代はこれを知っていた。

あの恐ろしい儀式のときに使う鎌だ。

「千代、あなたの番が来たのよ……」

確かにこの頃全然雨が降らない。

そして、前の、その前の年も雨が降らなかった。

「ねえ。お母さん嘘でしょ？私まだ死にたくないよ」

震える声で切実な願いを言うが

それが聞き入れてもらえるはずも無い。

「ゴメンね。千代」

「いやあああああー！ー！」

鎌を持つてゐる祖母を押し倒すと

千代は家の外へ飛び出した。

どこにでもいい、逃げなきゃ。

今は村中が敵。

助けてくれる人なんて一人もいない。

村から、出なきゃ。

「千代！」

遠くで声がした。

燦が叫んでいる。

「燦？」

「こっち！こっち！」

後ろから鎌をもった連中が追いかけてくる。

千代は燦めがけて走り出した。

「大丈夫？千代」

「大丈夫だよ。私、早く行かなきゃ」

草を掻き分けて、先へ進もうとしたが

時すでに遅し。

子供の力では大人には勝てなかった。

鎌を振り上げている大人が、千代を見下ろす。

千代が後ずさりしている隙に

燦は大人たちに抱きかかえられ、保護された。

「さ・・・燦・・・」

千代一人を死なせるわけにはいかない。

「千代！逃げる！逃げるんだ！」

でも千代は足が震えて立つ事も儘ならない。
その時。

千代の頭上から、大きな鎌が振り下ろされた。

どしゃつと鈍い音がする。

「千代ーーーーーっっ！」

生贄にされた少女はあっけなく死んだ。
と、思われた。

千代は頭蓋が割れたまま、また起き上がった。
血を滴らせて

千代はまた起き上がった。

「ちよ？」

燦も、周りにいる大人たちも声が出ない。
そして

「燦。さよなら」

そういうと、千代はふらふらと歩き出した。

「ば・化け物！！！」

鎌を持っていた大人が再び千代へ鎌を向ける。
また鈍い音がした。

が、千代は倒れることはなかった。

このとき、千代は何故死ななかったのか。

それは自分でも分からない。

ただ、そのときの記憶ははっきりと鮮明に覚えている。
そして、頭蓋の傷も癒えた、明治の時代に、

ぶつりと糸が切れたように千代は死んだ。
そしてまた、生まれてきた。
こんどは、王家の娘として。

不思議な輪廻。

時は廻る。廻る。

死ねない少女。

此処で死んでも、私はまたいつか生き返る。

不思議な輪廻。

時は廻る。

第十七話・否

「千代」

いままで過去の自分を見ていた千代がはつと現実に取り戻された。

「凜、起きたってさ。傍に居てあげた方がいいんじゃない？」
にこつと咲が笑いかける。

千代は慌てて部屋の中へ飛び込んだ。

その後すぐに、千代の嬉しそうな涙声が聞こえた。

「よかったね。千代ちゃんも、凜さんも」
「だな」

麻貴と音魁は顔を見合わせて笑った。

同刻。

水神の庵は凜の力が無くなった事を知った。
その同刻。

湾・斬・満にも、そのことが知らされた。

「やはりな」

ぼそりと庵が呟く。

その右隣で、秦が心配そうに庵を見ている。
敵は王家の姫をさらった。

それは、もうすぐ攻めてくるという合図でもある。

凜の力は女とはいえども強かった。

しかしその凜の力は消え、代わりに子供が四人。
力任せに暴れる事は可能だろうか

凜ほどの力を持っているのか。

答えは「否」だ。

ついさっきまで学生だった弱々しい子供に何ができよう。
秦は唇をかみ締めた。

「庵様。やはりあいつら如きが凜様の後継など到底無理なんじゃ・・

」
渋い顔をして秦が言う。

庵は無表情のまま立ち上がった。

「何処へ行かれるのですか？」

「・・・お前も来い。それと秦・・・」

秦が不思議そうな顔をして庵を見る。

鋭い目が秦を捕らえた。

秦は顔色一つ変えることなく、庵を見る。

「凜は所詮女だ。女が一人いようと欠けようと大差は無い。

それに、邪魔な奴は黙らせておけば良いだけの事だ」

身と身体に纏った布と水を翻し

庵は部屋から去っていった。

斬はその頃、蔭を引き連れて凜の部屋にいた。

満も湾も、煩と蘭を引き連れて、凜の部屋で待機していた。

「まさかお前があんな餓鬼の力の器になるなんて

思ってもなかったぜ。凜」

喉の奥から低い声が聞こえる。

凜は顔を伏せた。

「べつにいいじゃん。斬に関係ないもん」

完全にふてくされている様だった。

「にしても、大丈夫なのか？凜」

「出血がひどかったらしいな」

湾と満が代わる代わる声をかける。

蘭と煩も声をかけようとしたが

やめたほうがいいと蔭に止められた。

「なあ蔭。庵様と秦がこない。どうしたんだろっ」

「気まぐれなもの。でもそのうち来るわよ」

「大丈夫だよ、蘭。二人ともこちらに向かつてる」

耳に手を当てて煩が言った。

煩は耳がいい。

その瞬間、ぱたりと扉が開いて

二人が入ってきた。

「ね！あたったでしょ」

くすりと、煩が笑った。

でも、秦の顔色は、青ざめている、に近かった。

「どうしたの？秦。大丈夫？」

髪を翻し、蔭は秦に駆け寄った。

「・・・」

冥堂の手下達が、こっちに向かっている・・・。

数は・・・中体が七体。完全体が五体。

あと、冥堂自身もこっちに向かってきてる！」

何人かを除いた顔が青ざめた。

そしてその青ざめた顔は、柊たちにもはっきり分かった。

第十八話・魔性の男

五大神たちの顔が青ざめているのが分かった。

「ど・・・どうしたんだろう？」

腕に巻きついているチェーンを握り締めて麻貴が呟いた。

何を話しているのかまでは分からないが。

その時、柊の五感が唐突に何かを叫んだ。

危ない。

危険なものが向かってきている。

「・・・危ない」

「え？」

聞き取れなかったよ？

咲が聞き返した。

「危ないっつ！！！！」

空がごうつと翳った。

黒い雲が青かった空を包む。

それに気づいた柊は真っ先に空へと飛び出した。

「柊ッ！」

音魁が止めようと手を伸ばすが

あと数センチ、届かなかった。

「くそっ！咲！湾たちを呼んで来い！」

「わかった！」

指示に従って、咲は部屋の中へ飛び込んだ。

柊はどんどん黒い雲に向かって空を走る。

「柊くん・・・」

体が衝動に駆られたように

麻貴も手すりに足をかけ、走り出した。

危ないところで、音魁に右腕を掴まれる。

「おい！麻貴！馬鹿！何してんだ！？」

「だって・・・だって柊くんがあのままだと死んじゃうよ!」
掴まれた右腕を振りほどこうと暴れる。

音魁はなんとかこつちに引きずり込もうと、麻貴を引っ張る。
「放してっ! 柊くんが・・・柊くんが・・・」

そう口にしたとたん、麻貴ははつとある事に気づいた。

「なんで柊くん・・・空中を走れてるの?」

夢中で空を蹴って走っている柊は

途中であることに気づき、止まった。

「あれ? なんで俺走れてんの? こんな所・・・」

不思議になつて体の箇所を見してみる。

が、異変は無い。

「おつかしいなあ・・・?」

ひゅ。

無防備になつて隙を見せた柊の横を、何かが通った。

「?」

頬に赤い線が入って、赤い血が顔をのぞかせた。
手にも、足にも、少しずつ線が入っている。

「なん・・・柊くん! 後ろーーーーーっ!」

耳に押し込まれたように響いた麻貴の声で

柊ははつと後ろに振り返った。

おかしな化け物が一匹、

今にも柊を食い殺そうと口をあけて襲ってきた。

「わっ・・・」

無意識に手を体の前に翳^{カザ}す。

食われるっ・・・。

しかし、体に襲ってきたのは、咬まれた様な痛みではなく
びしゃびしゃという水音と、生臭い鉄の匂い。

目を開けると、化け物は死んでいた。

「え?」

まわりには柊以外味方は誰もいない。

なのに化け物は死んでいる。

「もしかして・・・」

腕を見ると、今朝はめた手甲が鈍く光っている。

その周りに、ひゅうひゅうと薄い風ができている。

「俺の力かな？」

のん気に手甲を観ていると

後ろから裂くような風音が聞こえた。

がしゃんっ！

危機一髪で振り返った柊の手甲が

さつきより大きな化け物の力を相殺した。

化け物を睨んでいた柊がふっと化け物の後ろを見ると

左の眼を、長い茶色の髪で隠している

青年が見えた。

「・・・」

牛車に乗っている。

妖たちが牛車の周りに集まって、きいきい騒いでいる。

青年は柊に笑いかけた。

首が揺れたので、癖の無い髪も一緒に揺れて

隠していた左眼が見えそうになった。

「その男が、冥堂だ」

いつのまにか後ろにいた俺が柊に語りかけた。

俺のピアスの水晶が光る。

眼も鋭く光った。

「姫をさらい、この世界を壊そうとする魔性の男だ」

第十九話・見込み

そこまで喋ると、俺は冥堂を睨みつけた。

くすくすと小さな笑い声が冥堂の口から漏れる。

「酷い言い方ですね。僕が悪者みたい」

「嘘ではないだろう」

言葉に怒りが混じっていた。

「元は同類だったのにな」

突然冥堂が発した言葉に、俺は我を忘れて飛び掛りそうになった。手を前に掲げ、水を発しようとした時。

「俺。止せ」

俺の目の前に湾の腕が現れた。

実態は無いようだが、長い金色の槍が俺を妨げる。

それを手にしているのは、満だった。

傷を負っているくせに、凜も手を伸ばしている。

ただ一人、斬だけが、俺を妨げなかった。

「やりたいやつにはやらせときゃ良いのによお」

「斬……。黙つとけよ。仲間割れは起こしたくねえかな」
湾の張り詰めた言葉に、くくくつと斬は笑った。

「其処までにしたらどうなんだい？」

はつと柊が顔を上げた。

牛車から降りて、冥堂が全身を現した。

黒い羽織で全身が包まれている。

ところどころに裂け目があり、そこから

気味が悪いほど真っ白な手を覗かせている。

「やりたいんなら、僕はいつでも相手するけど？
なんなら今でもいいよ。

全員ぶち殺してあげるから」

くすくすと、笑い声が聞こえた。

「ねえ、千代。大丈夫・・・かな」

下から見上げていた咲が、隣にいた千代の着物の裾を掴んだ。

「五大神じゃから大丈夫だとは思うが・・・」

千代が呟いたとたん、麻貴が声を荒げた。

「違うよ！咲ちゃんは、柊くんの事を言ってるんだよ!？」

麻貴の聞いた事の無い大声に

咲も、音魁も、千代も肩をびくりと振るわせた。

「ひ・・・柊は・・・」

柊は・・・。

ひゅん、と音がしたかと思うと

柊の喉元には、冥堂の手がかけられていた。

「おもしろいね。君」

「今度あうときは手合わせ願うよ」

そう言うと、牛車に乗り込み、風の如くに消え去った。

第二十話・何で殺されなかったの？

「い・・行っちゃった」

黒い雲は散り、青空が戻ってきた。

「柊！」

部屋に戻ってきた柊に、千代が飛びつく。

「怪我はないな！？・・・よかった」

麻貴も、咲も音魁も、ほっと胸をなでおろした。

そして、柊自身も。

まさか生きて帰ってこれられるとは、思っても無かった。

あの時。喉元に手をかけられたとき、あれが最後と思っていたが・・・。

「なあ千代。五大神の中に、冥堂はいたんだろ？」

思っても無かった言葉に、千代がはつと言葉に詰まる。

「わしは・・しらん。が、そんな事は無いと思うが」

「そうよ。突然何を言い出すのよ。柊」

「あいつは敵だ。まずありえない」

千代の言葉を援護するように、蔭と秦が

次々に言葉を投げかける。

「だって、同類って言ってたんだ」

たしかにあの時、あいつは庵にむかつて「同類」と言った。

それを聞いたときの庵の顔は、恐ろしく怖く

恐ろしく、悲しい顔だった。

「それは・・・それはきつと、あいつも神の端くれだからじゃないのかな」

煩が、ぼそりと呟いた。

「庵、あいつの言葉に惑わされすぎっ！」

ぽかつと音がして、凜が俺の頭を殴る。

「……………悪かった。でも、あの時殺しておけば……………」

「無理いうなよ。俺らじゃ殺せない。よくて相打ちってやつじゃねーの？」

近くにあったソファーに、音をたてて湾が座る。

すこしホコリが舞った。

ごほごほつと、咳き込む。

「でも、なんで柊を殺さなかったんだろうな……………」

腕組みをして、満が考えるような格好をする。

あの時点で、柊は殺せたはずだ。

あんな、神でもなんでもないただの子供……………」

「殺さなかった、じゃなくて殺せなかった……………じゃないのかな？」
顎に人差し指を当てた凜が、笑うように呟く。

「まさか。ふざけた冗談言うんじゃないよ」

「あら、あたしはちよつと本気だけど？」

闇の中に一つ、大きな大きな屋敷があった。

どの部屋も畳が敷かれ、長い廊下には怪しげな篝火カガリヒの行燈アンドン。

その屋敷の最上階の奥の奥の部屋。

そこに、冥堂は降り立った。

フスマ
襖をぱしんとあける。

部屋の中で一番目に付くのは、大きな、牢屋に似た檻。

その中に少女がひとり。

手足を拘束しているわけでもなく、ただ押し込めているだけ。
セミロングで、ブリーチされた栗色の髪。

フリルがついたドレスを着せられているから

日本の女の子には見えない。

「小夜様。ご機嫌いかが？」

冥堂は、少女・小夜・に笑いかける。

生きた目をしていない少女は、そのまま顔を上げた。

「・・・・・・・・・・此処からだして」

「それは出来ません。まだ時は満ちていませんから」

「此処から出してよ・・・・・・・・。私・・・・」

その声は、襖を閉める音で掻き消された。

第二十話・何で殺されなかったの？（後書き）

一応書いときます。

ブリーチ・・・髪の色を脱色させる事。

BLEACH（久保帯人・週刊少年ジャンプ掲載）
ではありません。

分かるかもしれないけど、一応。

第二十一話・咲の決意

「煩！神の端くれってどーゆーこと！？」

少々怒り気味の咲が、壁をけつとばして言う。

その音があまりにも大きかったので、煩は両腕を体の前に持つてきた。

軽い拒絶反応だ。

「まあまあ、そう怒っても煩が可愛そうだろう？」

「お前は黙ってる。クソガキ。それとも今此処から蹴りおとされてーか？」

「いえ・・・モウシワケアリマセン・・・」

一瞬で柵を制した。しかも片言にさせるとは。

その恐ろしさに、みんなの体が凍りつく。

「で！どーゆーことなのよ。煩」

おどおとしながら、煩が一步前に出た。

この五大神になるには、実力が要るんです。

強さはもちろん、その神々の位にあった知識や能力が絶対に必要なんです。

僕もつい最近知ったんですが、

満様・湾様・凜様・庵様・斬様は昔からの知り合いだそうです。

そしてその知り合いの中に、冥堂もいたらしいんです。

でも、冥堂は五大神の位に付く事は出来なかった。

何億という挑戦者の中で、運命なのか

この五人は受かったちゃったんです。

で、哀れに思った満様や湾様は

冥堂を配下に入れようとしたんですけど

時すでにおそしってやつです。

冥堂は闇の世界に足を踏み入れちゃったんです。

多分腹癒せつてやつだと思っんですけど
冥堂は、この世界を滅ぼそうとしてるんです……

「煩。それホント？」

咲の問いに、煩がこくこくと頷く。
うつむいたまま、咲は顔を上げない。

「咲。気に病むな」

「そうよ。咲。どうしたの？」

千代と蔭が咲の傍による。

柊もちよつと心配になった。

でも、これくらいの事で気に病むか？

つてゆーか、俺らが気に病む所なんてないだろ？

「気に病んでなんかいいわ」

そう言うつと、がばつと顔を上げた。

「何よその理由ー！腹癒せですつてー！？」

ふざけんのも対外にしるよあのクソボケーっ！

大体親の教育がなつてないっつーの！あんな奴！

あああ！今すぐになでも一発ブチかましてやりたいーっつー！」

お前も親の教育なつてないんじゃねーの？byー同

咲は其処まで叫び倒すと、空に向かつて

「お前なんか頭に電柱柱落つこちてきて死んでしまえー！ー！ー！
！！」

と、ある意味無理な事を叫んだ。

そんな様子を、中から凜が見ていた。

「にぎやかー。つてゆーか咲面白すぎーっ！

頭に電柱柱？あははははっ！無理無理」

お腹を抱えてのたうちまわっている。

「おい。大丈夫か？凜」

「あはははは！無理！もお無理！。きやはははははっ！

あははは！わ・・・笑い死にしそ・・・あはははっ！ひやははははっ

もう一度声をかけようと、湾は手を伸ばしたが
やっぱりその手を引つ込めた。

今声をかけると、なんか怖い事が起こりそうだ。

「よっし！決めた！私絶対あの馬鹿倒す！」

みんなが引き気味の中、咲は大空に拳を掲げて
そう、宣言した。

まだ、前奏曲に突入したばかり・・・

第二十二話・地獄が再び

「よし！わたし絶対あの馬鹿倒す！」

咲がそう宣言したのを、中から湾は見ていた。

「・・・早めに倒したほうがよくね？」

呟いたとたん、庵が湾を睨む。

「じゃあなんでさつき殺^ヤらせてくれなかった！？」

「それはお前が死ぬかも知れないからだ！」

腹の虫が治まらない庵は、部屋から出て行こうとした。

「待つて。庵。あたし天才！いい事思いついちゃったあ」

出て行こうとした庵を、凜が引き止める。

はつきり言つて、今の言葉はうつとおしい以外の何でもない。

「あのね！地下に修行用の場所があるでしょ？」

人差し指を立てて、いかにも「ひらめいちゃった！」オーラを出して
凜は無邪気に言つた。

「でね、その・・・凜！それはダメだ！」

慌てて、満が凜の言葉をさえぎる。

凜は膨れっ面になった。

どうみても可愛くはないのだが。

「満！なんでダメなのよぉっ！」

「危険すぎる！現にお前はあれで死にそうになっただろ！？」

「それは昔の話でしょ？みんな昔より強くなったじゃない？」

あれくらいできると思うわ？柊たちだって大丈夫よ！」

「それは余計ダメだ！あいつらは戦ったこともない子供だぞ！？」

「大丈夫ったら大丈夫！天心甘栗五十袋賭けるっ！」

「あのなあ・・・っ」

満の忠告も聞かずに、凜は大きな鍵を取り出した。
金色の大きな鍵。光に当たって、それが鈍く光る。

それを見て、斬だけがにたと晒った。

その頃、咲の迫力にやりきれなくなった蔭はひとり部屋の中に戻るうとしていた。

（なんであんなに騒げるんだろ……。私は無理だわ）

部屋に戻ったとき、一番最初に目に付いたのが斬の不適な笑みだった。

（……………！……………危ないことが起きそう）

斬が晒うのは、決まって何か危ないことが起こる前だ。

あの修行のときも……

！

笑みが似ている。

あの時と。

そっくりそのまま、あのときが戻って来たように、蔭は膝からがっくりと倒れた。

「蔭！？大丈夫か？」

異変に気づいた蘭が、真っ先に蔭へ駆け寄る。

「……あの時が戻ってくる……」

蘭の後に続き、中に入ってきた秦が、顔色を変える。

「あの時って、まさか煉獄凶のことか！？」

こくこくと、蔭が力なく頷く。

「……………くそっ！」

「ねえ、煉獄凶ってなあに？」

はつと振り返ると、不思議そうにこちらを見ている麻貴がいた。

奥歯をぎりぎりと噛み締める。

何も知らないこの子供。

あの地獄を知らないなんてなんて恨めしい。

この記憶をそっくりそのまま叩き込んでやりたい。

「ねえ、なんなの？？」

秦が駆け出そうとした。手に鋭い小太刀を持って。

「ダメっ！何やってんだよ！アホっ」

感情的になった秦を蘭が止める。

そこでやっと、秦が落ち着いた。

まだ麻貴が不思議そうに見る。

「・・・・・・・・煉獄凶は、地獄だ・・・・・・・・」

第二十三話・行こ

煉獄凶。

この神殿の地下にある、神々の修行場。

此処で修行をして、生きて帰ってこれる確率はよくて三十%。

毎回毎回、何人もの神が命を落としている。

その死体を片付けようとする者が誰もいないので、死体は風化し、砂となり

どこかへ飛んでいってしまう。

だが、風化するのに恐ろしいほどの時間がかかるので

煉獄凶は死体の山となっている。

焰が渦巻き、鬼がひっそりと腹をすかせて獲物を待っている。

そこはまるで地獄絵のような場所である。

「だから煉獄凶なんだ。怖いところだね」

話を聞き終えた麻貴は、両手を握り締め、秦と視線をあわせなかった。

何か悪いことを聞いたのかもしれない。

こんな記憶を持っているのなら、誰だって思い出したくないはずだ。なのに、無理に聞き出してしまったような気がする。

「なんか、ゴメンね。嫌なこと思い出させちゃって」

秦は目を丸くしたが、すぐにフンツと顔を逸らした。

周りの空気はどよっと重くなった。

その空気を知ってか知らずか、るんるん気分の凜がスキップでやってきて

「煉獄凶で修行するから。これもう決定事項だからっ！

異議があるやつは首を真っ二つに切るから」

と、恐ろしいことを笑いながら言った。

お前がやらないからって、人の命を無駄にするような事言いやがって。

ってゆうーか五大神たちは反論しなかったの？

「うん！みいーんなやる気満々だったよお？」

麻貴の心の問いに、凜は嘘っぱちを並べて答えた。

遠くで、湾と満がぶんぶんと首と手を振っているのが見えた。

「それに、あたしの式狐シキギツネつけたげるし」

凜は、つま先を立てて舞うと、幻術のような狐がわらわらつと現れた。

二度目だが、これは何度見ても見慣れない。

柊たちも部屋に戻ってきた。

すると、その柊たちの体にするすると狐が巻きついてきた。

「わ！？」

そして、体に入り込んだ様に、消えた。

それは柊たちだけではなく、秦や庵のような神もそうだった。

「あたしの力は消えちゃったけど、治癒ならできるよーん」

かかかっつと、下品に凜は笑った。

千代は、この凜の笑い方が、なにより嫌いなのだが

あえて我慢した。

この狐を、ひとりだけ拒んだものがいた。

斬だった。

「俺はいらねえ。こんなの邪魔になるだけだ」

凜はむくれた。

「いいわよべつに。あんたなんかこっちから願い下げだしーっ！」

べえーつと赤い舌をだして、凜も抵抗した。

そして鈍く光る鍵を持ち直すと

「行こ？」

とだけ言って、人質のように柵を引っ張り出した。

地獄へ、向かうことになった。

第二十四話・別々

それは地獄というには、あまりにも言葉が足りない。

「此処が煉獄凶？」

柊が、息を呑んだ。

死体が山のように積み重ねられている。

ちよつと、引く。

「やだな・・・怖いよ・・・」

さつきとは打って変わって、咲がおびえだす。

風が吹き、かたんと死体が揺れたので、咲は喉の奥からひっと声にならない声を出し、柊にしがみ付いた。

それに驚いた柊は、咲の手を払った。

が、もう一度咲はしがみ付き、

その様子を千代がニヤニヤ見ている。

「じゃあ・・・頑張つてねっ！」

水が流れるように凜が手を振る。

その瞬間、みんなが別々に別次元へ飛ばされた。

どすっ！

柊はいきなりの事に驚き、尻餅をついた。

そして、その後すぐに目に入ってきたものを見て、驚愕した。

それは口からだらだらとよだれを垂らした、鬼だった。

しかもただの鬼じゃない。

上半身が三つ有り、下半身が一体になっている。

無駄に大きい。柊たちなんて一発でオダブツになりそうだ。

さて、どう対処しようか？

なんてのん気なことを考えている柊の横を、何かがすり抜けた。
「きいやあああああーっ！！！！！」

咲の髪の毛だった。

「来ないでええええーっ！気持ち悪いいつつ！！！」
「さすがっ！」

次に目を開けたときは、鬼は血まみれで死んでいた。

「ふうっ！あー怖かったあっつ！」

「・・・あなたが一番怖いと思いますけど・・・？」

「咲ちゃんすごいねえっ！見直しちゃった」

そこは見直すところですか？

同刻。

「此処・・・煉獄凶でもまだマシなところだ・・・」

煉獄凶は、百の修行場に分けられている。

数字が大きいものほど、レベルが高い。

ちなみに、此処は煉獄凶第六十五番「血雨^{チサメ}」。

「千代がない。あの子達について行ったのね

「最高は九十一か。だれだろ・・・？」

「あ・・・ほんとだ。感じる。九十一と八十八」

「なあ、これつてもしかして・・・」

煩^{ナダ}が耳に手を当てる。

この戦い方、なっていない。

我武者羅に、ただ前にあるものをぶっ潰していく。

「もしかして・・・」

同刻。煉獄凶八十八「死魂^{シコン}」

すでに戦いは始まっていた。

「ちっ・・・凜のやつ。こんな生ぬるいところに送りやがって・・・」

「そうか？此処で十分っ！」

イライラと舌打ちをする斬を湾^{ナダ}が宥める。

「煩^{ナダ}たちは六十五か。凜、手加減したんだな」

満が腕を組んでほっと笑う。

大事な部下だ。何かあったら困る。

「そうか……。あのボケ女……。」

あいつらを殺す気なんだろ」

「あいつらって……。まさか」

俺が襲ってきた鬼を水で跳ね返す。

「柊とかいう餓鬼だ」

「うふふふつ。みんな……。がんばってねえ」

当の本人は、片手に点心甘栗

片手にお茶をもって、完全に楽しんでいた。

第二十五話・それぞれ

同刻。煉獄凶第九十一「鬼火^{オニビ}」。

「いやあああああーっ！」

相変わらず響くのは咲の大きな絶叫。

そしてどしゃどしゃという、死の音。

「おい咲。もうちょっとましな攻撃の仕方をしろ」

「だって……。千代ちゃん見てよ！あの気色悪い鬼っ」

涙目で、咲は一匹の鬼を指差す。

片方の目が、どろっと落ちていて

原型すら保てていない、確かに気色の悪い鬼。

が、咲めがけて走ってくる。

「こつちくんあああああああ！！！！」

咲の髪が乱れるように、鬼へ飛んでいき、鬼を真つ二つに割る。

その様子を、柊と麻貴と音魁はぼーっと眺めていた。

「すげえな……」

「ある意味な」

「咲ちゃん、もう技の名前言わずに発動出来るんだあ。すっごくいい麻貴ひとり、手を叩いて本気で凄いと思っている。」

と、柊の横を何かが通った。

「来たっ！」

鬼……。じゃない。

何に例えればよいのかいまいちよく分からない

まあ、一言で言えば妖。

「なんだこれは。きもちわり……。柊くんっ！ここはボクにやらせてっ！」

ぱっと、柊の前に麻貴が飛び込んだ。

麻貴の見据えた目がきらつと光る。

「リウーっ！」

ぶんと右手を上げる。上げた反動で、龍の目が紅く光る。

「敵はあいつだよ！リウっ」

『承知』

どうやら、リウというのは、その龍の名前らしい。

リウは、口を開けると、その妖を頭からばりばりと食した。

妖は咲のような絶叫を上げ、消えた。

「リウ。ありがと〜ね」

『これくらい造作もないこと』

麻貴がやった〜と飛び跳ねて、嬉しそうに戻ってきた。

「凄かったでしょ？」

「え・・あ、うん」

曖昧に、柊は答えた

が、柊も音魁も聞きたい事は一つ。

「何で名前がリウなの？」

麻貴がにぱつと笑った。

「リウは龍じゃん？でも、「リユウ」だったら味気ないじゃん？

だから「ユ」をとって、「リウ」。可愛いでしょ？」

本人はとても気に入っているみたいだが

こちら側からすれば、よく分からない。

同刻。「死魂」

ただひたすら戦うのみ。

目の前にいる敵を叩きのめす。

肉をえぐり、敵の鮮血をこの身に浴び

自分は強くなるのだ、と願い、前に進む。

「・・・なあ満。おかしくないか」

「・・・確かに。いくら戦っても、敵が減らない。数に限りはある

はずだ」

そうだ。

鬼や妖だって、永久に生きれるわけではない。
そんなに数が増えるわけでもない。

なのに、多すぎる。

同刻。「血雨」

「つ……疲れた」

煩ががくりと倒れる。

「煩っ！大丈夫か」

敵をぶっ飛ばした蘭が、急いで駆けつける。
敵の攻撃を受けたからなのか、青黒いアザ。

「治療してやる。休め」

自分の身長と変わらない煩を、片手で担ごうとした。

でも、心がいくら男でも体は女。

男の体を女が片手で担げるわけがない。

「貸せ。俺が持つてやる」

ぱつと手を貸したのは、秦だった。

蘭は突然の行動に驚き、立ちすくんでいる。

「んだよ」

「いや……。あのすかしてて、いつもなんかムカつくような物言
いで

気分の悪くなるようなやつだったお前が、まさかこんな事するとは思
わなくて」

「てめえ、なぶり殺されてえのか？」

相変わらず目は冷たい。

が、何かが変わった気がする。

蔭は、秦の後姿を見て、くすつと笑った。

「何てめえも笑ってたんだよ」

「べつに」

何が変わったのだろうか？

この修行をしてるといふ事は、もうすぐ敵の陣地へ乗り込むといふ事。

ゲームが、始まるという事。

命がけのゲーム。

終わったら、私も何か、変わるかな？

終わったら、あいつの変わったトコ、分かるかなあ？

第二十六話・水晶をみつけだせ

暗いくらい空間の中を、ボクらは旅をしている。

「なあ千代。此処でずっと敵ぶったおせばいいのか？」

そろそろ同じことに飽きてきた柊は、親指ほどの小鬼を足で造作なく踏み潰して、言った。

「そんな訳なかるう。きつと此処の何処かにある水晶を手にしなれば」

後ろから襲い掛かってきた妖めがけて

千代は自分の簪^{カンザシ}を突き刺した。

悲鳴とともに妖が消える。

「何処かって・・・こんなところも左も砂漠じゃねーか！」

思わず柊は大声で激怒してしまった。

此処の何処かって、この無限のような空間を

ふらふら水晶を求めて彷徨えってか？冗談じゃない。ふざけるな。

「それに喉が渴いた！」

「あの向こうに湖がある。ついでにこの砂漠の空間で水晶を見つけないと」

わしらは一生出てこれんぞ」

賢明な判断だ。

音魁はそう思つて、湖めがけて歩き出した。

「まっつて！音魁どこいくの？」

「千代の言葉は合っている。まずはあの湖を目指す」

ずんずん歩いていく音魁に遅れを取らないように

咲と麻貴も歩き出した。

その音魁の後姿が、柊にはやけに大きく見えた。

その頃、「血雨」では、煩の手当てが終わったところだった。

「よし。オツケー。大丈夫だぜ。煩！」

「ありがとう。蘭。さすが女の子だね」

「女じゃないっ！バカ煩っ！！」

ぱしんと、蘭が煩をはたく。

でも、蘭の顔はちよつと赤くなっている。

照れている証拠だ。

なんともほほえましい光景である。

その様子を、蔭は楽しそうに見守った。

「はいはい。痴話喧嘩はそこまで」

「こんな時に夫婦漫才しなくてもいいだろ」
メオトマンザイ

その言葉に反応して、二人一緒に秦をはたく。

ぱしん、なんていう音じゃなく、ホントに痛そうなばしーんという音だった。

「何すんだコラア！つーかなんで蔭は叩かねーんだよ！」

「「蔭は女の子じゃん」」

「お前だって女じゃねーか。変人蘭」

もういちど、濁いた音が響いた。

「もういいでしょ。とにかく、今は水晶を見つけるわよ」

「そうだね。怪しいのは・・・あの寂れた宮殿かな」
サビ

「前の修行もあんな感じの所だったな。ん？なんで倒れてるんだ？
秦」

「てめえ・・・もう自分がさっきやった事忘れやがって・・・殺してやりたい」

なんともにぎやかな四人組だった。

同刻。「死魂」の四人組は

水晶のために戦っていた。

「うおおおおお！！！」

戦いの音しか聞こえない。

ローマの宮殿のような所。秦たちの所みたいに寂れているんじゃない
くて

今でも誰か住んでいるんじゃないか、と思えるくらい綺麗な宮殿。
だから、怖さが増す。

ところどころに飾られた鎧ヨロイが、大きな剣を持つて

襲い掛かってくる。

「おらああああ！」

デノヒラカッショウ

掌を合掌させて、それから片方を前にだす。

すると、その手から大きな焰が溢れ出し、周りを焼き尽くした。
これは、湾にしかできない特別な技。

「おい湾。もう少し焰を小さくしろ。水が出せないだろ」

「だーから！これが限界ッ！ようは倒せばいいんだよ」

この四人は、それぞれがそれぞれに因果関係を持っている。
チームワークはいいほうではない。

再び、柊たちにもどる。

遠くに見えた湖は意外と近場で、この間妖にも合わなかった。

「ラッキーだね」

「だねっ」

顔をあわせてくすくす笑う咲と麻貴。いつも楽しそうである。

「そういえば、千代ちゃんはさつきから持ってるのは何？」

千代の掌には溢れ返るほどの飴玉があった。

「千代！抜け駆けは許さねえ！俺にもよこせっ！」

「騒がなくてもやるつもりじゃ。この飴玉はな、

死んだものの魂を収めた飴玉じゃ。これで我々は生きている。
味は・・・甘い。ハズレは辛いかな」

柊は、出した手を引っ込めた。

死んだものの魂？

これで我々は生きている？

「・・・酒とか、甘栗とかじゃねーの・・・？」
「ああ、アレの元はこれじゃな」

不思議な飴玉は、みんなの掌に一つずつ落とされた。
淡い水色、透き通るようだった。

第二十七話・飴玉

「食うてみい」

その飴玉は恐ろしいほど不気味に光っていた。

怪しい。もしかしたらこれを食べた瞬間死ぬかも・・・

「わーい！いただきまーすっ！」

何の疑問も持っていない麻貴が

その飴玉を口に放り込んだ。

普通の飴玉みたく舐めていると

「・・・んん！？」

突然麻貴が倒れた。

「「麻貴ッ！」「」」

柊が体を揺ると、口から唾液とともに飴玉が転がり出てきた。

「麻貴！オイ大丈夫か！？」

「げほっ・・・喉の奥に入っちゃった・・・」

ん？どーしたの。柊くん。あ、ゴメン千代ちゃん。もう一個飴頂戴」

柊たちの心配むなく、麻貴はもう一つの飴玉を舐め始めた。

その顔は、甘いものを食べたときの幸せそうな顔だったが

「・・・ふざけんじゃねー！バカ麻貴ーっ！」

柊には、とても腹立たしく見えた。

同刻、「血雨」。

守護組四人がたどり着いたのは、寂れた宮殿。

一歩一歩歩きたびぎしぎしと嫌な音がする。

先方は秦と蔭。後方が蘭と煩。

しばらく進むと、四つに分かれた階段があった。

その階段を伝うと、別々の道が切り開かれている。

「どうする？」

「一人ずつ違う道を進む。行き止まりになったら戻ってくる。」

一応、^{ブンキ}聞機を持って行く。これでどうだ？」

聞機とは、現代で言うトランシーバーのような物。

ヘッドホンに近い形をしていて、それを首に引っさげる。これで、離れていても会話が出来る。

「じゃ、私はこの道を行くわ」

蔭が自分の目の前にある階段を差した。

「蔭がそこなら、俺は此処に行く」

すぐ右隣の階段を蘭は見据えた。

「うゝむ……。じゃ、僕此処行くねっ」

一番左端の階段。蔭が選んだ階段の左隣。

「仕方ない。俺は此処に行く」

秦が、一番右端の階段の前に立った。

「じゃあ行くわよ。みんな」

「『『『健闘を祈る！』』』」

それぞれは、走り出した。

同刻。「死魂」。

此処の宮殿は無駄に部屋がありすぎる。

だから、何処に水晶があるのか、検討が付かない。

しかも聞機を使わずの単独行動。

チームワークはやっぱり悪い。

「この部屋も誰もいねえ……。つまんねえじゃねえか」

そして、斬は三階を中心に徘徊していた。

しかし三階ははずれだった様で

敵が一匹も現れない。

と、その時

「^{キキキキキキキキ}危機奇危機奇危機鬼！」

奇声を発したサルのような妖が、斬めがけて走ってきた。

鋭いつめに、すばしっこい足並み。

「ハン！」

斬は、それを軽くあざ笑った。

そして、その妖を、自分の大きな掌で

ぐしゃりと握りつぶした。

それは呆気なく死んでしまい、切り離された胴体がびくびくと動くだけだった。

「なんだ・・・雑魚ザコかよ」

もつと俺を楽しませてくれる奴等はいねえのかよ？

「はははははははは！！！！！！！！！！」

第二十八話・煉獄凶・柊組編其壱

（音魁）「気に食わない！」

（麻貴）「何が？」

（音魁）「この二十九話めのタイトル！」

（咲）「なんで？」

（音魁）「柊組って書いてあるだろ？なんで柊なんだってこと！」

（柊）「そりゃー・・・主人公だから？」

（咲・音魁）「えええ！？主人公って柊！？」

（麻貴）「柊くんじゃないの？」

（柊）「麻貴はいい奴だな・・・。オイ、殺すぞデメエら・・・。」

（千代）「いい加減にしろーッ！馬鹿共！」

と、いう会話を展開していたのだが、

頭にきた千代の蹴りがひとり一発ずつ入ったので

柊たちは、宮殿にむかつて歩く事にした。

「でもね。なんかあんまり怖くないところだね。

蔭ちゃんとか秦くんはとつても怖がってたのにね」

麻貴が下唇に人差し指をあてる。

なにか考え事をしている時は、いつもこれなのだ。麻貴の癖。

「ああ、それはな。

凜様が修行に入ったときに、あいつらも一緒に行きたいって駄々こねて

それで連れてったのはいいんだが

まだちっちゃい頃だったから死にかけになつてな。

だからあんなに恐れていたのじゃ。

まあ、その時もわしは賢かったからな。付いて行くななんて事はしなかったのじゃ」

自業自得って事だ。
麻貴はちよつと安心した。

時には砂嵐に見舞われ

時には泥濘ヌカルミに足を取られながら

時には敵と戦いながら

柊たちは宮殿に到着した。

「宮殿って・・・これ・・・無駄に大きいね」

宮殿を見ての一番最初の咲の感想がこれだった。

「ハズレじゃ」

「ハズレ？」

「大きい分、部屋が多い。水晶が見つけにくいということじゃ」

「それ最悪じゃん？」

咲が溜息をつく。

不安になってきた。

私なにやってんだろうなあ・・・。

帰りたいかも。

だって怖いよ？死ぬかもしれないんだよ？

「なに辛気くせえ顔してんだよ。もとはといえばお前の所為なんだからな」

俯フツムいていた顔をあげると

いかにもめんどくさそうな顔をしている柊がいた。

肩にかかりそうでかかってない、男にしては長い髪が

砂嵐とともに舞い、それを手でばりばりとかいている。

「そーだよっ！やり始めようって言ったの、咲ちゃんだよ？」

下の方から声が聞こえる。

自分より、遥かに背の小さい麻貴。

長い裾スツからちよこんと出ている可愛い指先が

しっかりと、咲の冷たく冷えた手を掴んでいた。

「俺はよく分かんが、万が一の時は護ってやるさ」

ぼん、と温かい手が頭の上におかれた。

音魁の茶色がかった目は、優しく咲を見る。

「そうじゃ。なにもお前一人じゃない。」

此処に、頼りないし、ダメダメな一応主人公の柊と」

そこまで言つて、柊を見る。

「背は小学生並みに小さいが、まあ使えそうな麻貴と」

嫌みつたらしく麻貴をみて

「髪ばかりちゃらちゃら伸ばしている音魁と」

散々暴言をはいて音魁を見て、

「この天才少女、千代様がおるじゃろ」

最後、偉そうに自分を指した。

「・・・うん！」

につこり笑顔になつて、咲が笑う。

ここまではいいのだが・・・

「てんめええええ！よくも好き勝手言ってくれたなあ！？」

「酷い！背が伸びないのは仕方ないんだもん・・・。千代ちゃんのばかあ！」

「髪を伸ばしてるのは俺の勝手だろ！？」

三人が千代に突っかかる。

「やめる。汚い。唾がとぶ。ついでにわしの半径1m以内に入るな」

「このヤロ・・・！一発ヤキ入れてやるうか・・・！？」

柊が拳を振り上げた時。

柊の後ろ頭に拳骨^{ゲンコツ}が落ちてきた。

「そうだ・・・！そうだよね・・・。なに落ち込んでたんだろう？
よっし！みんなっ！いくぞおーッ！」

完璧に立ち直った咲がきやいきやいと飛び跳ねた。

「これって、ポジティブ・シンキングっていうんじゃないのかな？」
「いや・・・絶対違うと思うぞ？」つか柊。大丈夫か？哀れだな。主人公なのに」

「・・・いやみか？それはいやみか？」

「よっしゃああ！死んじやわない程度に頑張るぞー！」

あなたの横暴な行動によって死にそうな人間が一名いるんですけどね・・・。

第二十九話・煉獄凶・柊組編其貳

その扉を開けてはいけなかったのかもしれない。

「きつたなーい。蜘蛛の巣とかあるし」

確かに其処は汚かった。

ホコリにまみれた、赤い絨毯が

ジュウタン

不釣り合いなほどに光って見えた。

「じゃあ、此処から真つ直ぐ進むぞ。

一階を全部みたら二階な」

千代が、先立って歩き出した。

中は、広いのに無に等しかった。

食堂には、食器棚はおろかテーブルすら無く

それぞれの部屋にも、小さなベットがあるだけだった。

敵も、いない。

「こーゆのってなんかヤダ……。どうせなら敵とか出てきてぶつ飛ばすほうがいいんだけどな」

何もないような場所では

不安という感情がより掻き立てられて

お腹のあたりがむずがゆくなつて

心臓がばくばくと音をたてる。

「そう？安心じゃん！こういうほうが」

麻貴の辞書にはそういう感情が載ってないのか？

「不安とか感じねーの？すげーな。超人だ」

「ちっ・・違うもん！静かな所が好きなだけだもん！」

一生懸命反論してくる麻貴が可愛くて

思わず、髪をくしゃりと撫でた。

「わわっ・・・！」

「あ！分かった。柊・・・麻貴のことがす・・・んなわけあるかバカ」

咲の言った言葉をさらりとながす。

流されたのがちよつと悲しくて、咲は柊を一発、（軽く）叩いた。

一階の最後の部屋。

そこは特別扉が重くて、幼女体型の千代には開けられなかった。

「此処は水晶があるかもしれんな」

その言葉につられて、全員が（麻貴を除く）扉を開けようとする。

「みんな単純だなあ！。あはは」

「麻貴・・・おまえ意外に賢いんじゃない」

しかし、やっぱりその扉は重く

渋々麻貴が手伝って、やつと開いた。

「やった！水晶ゲットだ・・・」

飛び出した柊の体が、くんと下に落ちるように動いた。

それは、見間違いではなかった。

この部屋には、一定の場所にしか床がなかったのだ。

しかも入った瞬間に、扉は閉じられ、開かなくなった。

「くそっ・・・！^{マジック}罠か！」

唯一浮いていられる千代が、一番軽い麻貴を抱きかかえて面積の狭い床に下ろす。

その他は、まあなんとかそれぞれの床に降り立てた。

「千代！てめー嘘つきやがったな！」

「わしは嘘はついておらん。かもしれない、といったんじゃない。

しかもその証に麻貴は扉を開けようとしなかったじゃろ。

この中で麻貴が一番賢いんじゃない」

「ぐ・・・っ」

やれやれと呆れるように溜息をつく千代に

柊は言い返す言葉もなかった。

「なあ・・・千代。此処からどうしたらでられるんだ？」

ちよつとかつこよく着地した音魁が

冷静に物事を判断しようと、思考をめぐらす。

「・・・・・・選択肢は三つだ。」

壱・此処から真つ逆さまに落ちる。

貳・あの扉をブチ破る。多分無理。

参・このまま餓死か過労死じゃな」

「おい・・・・それ選択肢っていうのか!？」

なにがなんでも酷すぎる。

もう少し言い返そうと思って口を開けた柊の視界に

紫色の煙が入った。

「!？」

その煙の中からあらわれたのは、青年男子と女子高生っぽい女。

格好は、ありそうでない民族衣装に似ている。

金髪でオールバックの髪型。赤くて腰まで伸びているロングヘア。

「ふうーっ。久々のお客様だぜ・・・・。丁重におもてなししねえとなあ・・・・？」

「ばあーか。とつととやっちまうよ。あたい面倒なの嫌いだし。

凜さん。トロトロしてつと文句言ってくつからよ」

二人は適当な話をちやっちやとすませて、

柊のほうをみた。

「あんたが柊?ふーん。意外と好みかもっ」

「お前ら・・・・誰だよ」

柊の言葉に、二人は顔を見合わせ、向き直った。

「俺は凜さんの式狐の一匹。トーチ」

「あたしは同じく式狐のエマ」

呆然としている柊の前で

戦いの火蓋は切って落とされた。

第三十話・煉獄凶・柊組編其参

エマの頬には、赤い絵の具で線が入っていた。
口元が吊り上がる。

その瞬間

「ぼさつとしてんじゃないよお！」

柊のしがみ付いていた床が、エマの拳で叩き割られた。

その衝撃で、柊は壁に叩きつけられ

真っ逆さまに落ちていきそうなのを、音魁が受け止めた。

「大丈夫か」

「あ・・ああ、大丈夫」

音魁は此処に来てから、異様に身体能力が上がっている。

麻貴も咲もそうだが。

でも、一番成長しているのは柊だった。

（こいつ・・壁に叩きつけられても骨ひとつ折れてない・・）

それだけ、柊は成長したみたいだ。

「おい。ルール言ってるねーのに動いてんじゃないよ。クソが」

「わりい」

長い髪を手ですいて、ばさばさと顔をふる。

「じゃあ。ルール説明ね。あ、ちなみにデスマッチじゃないから安心して。」

制限時間は三十分。その間にあたいらに悲鳴を上げさせたら勝ち。

かわりに、あんたら全員が悲鳴を上げたら負け。簡単だろ」

エマは、ピエロが履くような靴をこんこんと鳴らして

不敵な笑みを浮かべた。

「三十分ってのはみじかくねーか？」

「うるっせーな。黙ってるよ。ハゲ」

「ツツーか俺ハゲてねえし」

二人はお互いを見ずに言い争いをして

予告もなしに、飛び出した。

エマが最初に目をつけたのは、咲だった。

「へーえ。あんた綺麗な髪してんじゃーん。あたいうエーブかかってんの大好きー」

「!？」

何時の間にか、咲の隣に降り立って咲の髪を撫でている。ものすごいスピードだ。

「でも、今そんな事言ってるんじゃないのよねえー」

くくくつと喉の奥からおかしな声が聞こえたかと思うと

咲は腹部に重い痛みを感じた。

「きゃああ・・・!」

それはエマのパンチだった。

手は小さいのに、威力は大きい。

「はいっ。あんた失格う。おつしまーい。バイバイ」

咲はそのまま、ぐらりと傾いて奈落の底へ落ちていきそうになった。
「咲ちゃ・・・おつとお。てめーは自分の心配してたほうがいいんじゃないの?チビ」

思わず咲に声をかけた麻貴のくびには

トーチの大きな爪がかかっていた。

「麻貴っ!」

身の危険を感じて、千代が其処から離れる。

「ち・・・千代ちゃんの裏切り者~~~~!」

「今はそんな漫才をしている場合ではないっ!」

麻貴は小さな体でトーチの手からすり抜け

背後に回った。

「リウツ!」

トーチに向かって手を伸ばし、高らかにその名前を呼ぶ。

ターゲット
『標的は?』

「あいつだよっ!」

そのまま、トーチめがけて手を振る。

ぐあああつと大口を開けたリウが、突進を始める。

そしてトーチの右脇腹に噛み付いた。

「あぐう・・・っ！」

金髪が揺れ、そのまま倒れこんだ・・・かに思えた。

「調子乗ってんじゃねえぞクソガキヤアア！」

脇腹にリウが刺さったまま、麻貴を殺そうと向かってくる。

リウで繋がっているのが不利だ。

「リウ！戻って！」

「遅いわ！ボケガキヤア！」

目の前に迫ってくる男が怖くて、麻貴は反射的に目を閉じた。

何か聴こえる。

ボクの悲鳴ではない。

じゃあ、これは・・・。

「があああああ・・・！」

「一ノ舞・音音^{ネオン}」

麻貴の目に入ってきたのは、叫ぶトーチと椿の花と一緒に舞い踊る

音魁だった。

黒髪が揺れる。とても幻想的だった。

「・・・死ぬ・・・」

音魁の手中にあった扇子が、トーチの首の後ろを突く。

どさつと音を立てて、トーチは倒れた。

「ふん・・・大丈夫か、麻貴」

「うんっ！だいじょーぶ！ありがとね。でも凄いね

自分で作ったんでしょう？その技」

「頭の中で見えた舞と、聞こえた音を頼りに作ったんだ。

自分で作ったものじゃない」

麻貴を抱きかかえて、音魁は咲を助けに行った。

危うく落ちそうだったのを、壁の角に引っかかっていた。

「大丈夫か？咲」

「んう・・・？あ、音魁。大丈夫よ」

「てゆうかさ、式狐って守ってくれるんじゃないの？」

「あのクソアマ。嘘ついたんだな」

角に引っかかった咲を助け、ひとつの床に降り立った。

「あとは、柊だけだな」

「・・・そうね」

「頑張つて！柊くんッ」

三人がエールを送っている中で

柊は千代の援助を貰い、戦っていた。

「あたいはトーチみたくなくないんでねえ。感情的にはならないのさ！」

ロングスカートを履いているとは思えないしなやかな動き。

上半身は、胸だけを布で覆っている。

格好的には難しいと思われる手と足で繰り出す物理的な一直線攻撃。それが出来るという事は、相当の力を持っているはず。

だか、隙ができれば・・・勝てる！

「柊。技を使え」

「え？」

「お主、自分の技を作っているじゃろう？」

素敵な笑みを浮かべた千代は
柊の肩から離れた。

「いけ。お主ならできよう」

「わかってるつての！行くぜ！バカ狐！」

第三十一話・煉獄凶・柊組其四

勝てる。

自分を信じて。

大きく息を吸い込んだ。

肺に空気が入って、満たされていく。

「よっしゃ！いくぞっ」

「ハッ！出来るもんならやってみな！」

柊は左足を軸に前へ飛び出した。

エマを目掛けて握った拳を押し出すが
早い動きで背後に回られてしまう。

「くそっ！」

加速したままだが

足元にあった小さな床に着地し、身を屈^{カガ}めて
飛んできたパンチを避ける。

そのパンチは、柊が着地していた床に急降下し

床は、圧力で叩き割られた。

柊は先を見切って、0.1の速さで次の床へとジャンプした。

「ちい・・・すばしっこいねえ」

（あたいを疲れさせるつもりか！？そうはいくか！）

「てめーなんかに殴られたかねーんだよっ！」

（にしても時間だけが過ぎていく・・・どうにかしねーと！）
バキィ！

鈍い音がして、二人の拳がぶつかり合った。

どちらも、拳から赤い線が流れる。

血だ。

「柊！なぜ技を使わんのじゃ！」

「うるせー！使うタイミングがねーんだっての！」

空中で何度か宙返りをし、両者同じようなタイミングで足をつけた。
(・・・！今なら出来るかしんねえ！)

柊は両の手を大きく広げた。

そのまま右手だけを宙に掲げ、左手を下ろす。

「？・・・何をする気だ？」

掲げた右手で、何かを掴むように十字を切った。

そしてその手を下ろすと、柊の足元に風が集まった。

ゴウゴウとうねりをあげて。

イチフウ イガラシ
「一風・五十嵐」

柊が言葉を発したとたん、その風は

エマめがけて竜巻のように突進した。

「くだらないね！玉碎ギョクサイしてやる！」

強気で風を睨んだが

その風は力を弱めることなく進んでくる。

「えっ・・・」

やばい。

このままじゃ、確実に死ぬ。

だが、もう遅かった。

竜巻は、エマを取り囲み、襲ってきた。

「いやあああああー！！！」

ふっ。

もう一度、柊が十字を切ると竜巻は消えた。

「や・・・やったね！柊くんっ！」

嬉しさのあまりぴょーんと飛び跳ねた麻貴の顔に

ぽかっとかが当たった。

それは、緋色ヒイロに輝く水晶玉。

「ありり？」

「あたいらが負けたからね。もっていきな！」

声がするほうを見ると、さっき倒したはずのエマとトーチが無傷で立っていた。

柊と音魁が構える。

「そんなにあせんなつて！俺ら負けたから、手出しはしねーよ」

「だいたい凜さんはあめーよ。此処で水晶渡せだなんて！」

腰に手を当てたエマは、心底呆れ顔だった。

「でも、久々に楽しめたよ！あんがとな」

呆れ顔が笑顔に変わり、ぱちんとウインクをした。

それはそれは、美人で素敵に見えた。

「咲もあれくらいだったらな・・・」

「どーゆー意味よ!？」

「いいじゃん。水晶手に入ったよ？」

「バカは放っておけ。麻貴」

「じゃ、あたいらは消えるね。この宮殿でたら、すぐに凜さんのところにいけるよ！」

そういつて、二人はテレポートするように消えた。

そしてその言葉通り行くと、もとの世界に足を踏み入れる事ができた。

「おう！お疲れさん！どーだった？楽勝っしょ？」

「まーな」

柊の言葉に、三人は顔を見合わせ、くすつと笑った。

「ほかのみんなは？」

「もうとつくに帰ってきてますー。あんたら待ちきれなくて帰っちゃったよ」

「薄情なやつらだ」

なにはともあれ、柊たちは無事に帰ってこられたのだ。

次話は、少し時間を^{サカノボ}遡る。

第三十二話・「修行、終了！」

四ルートに分かれた守護組は、それぞれの道を走っていた。

「なんもない・つまんねーの」

蘭は道無き道をとこと前に進み

どうにか水晶と出口を探していた。

蘭は手に聞機を持って、口に近づけた。

「このまま行っても行き止まりかもしれない」

『かもしれないでしょ。とにかく行き止まりまで行ってちょうだい』

聞機の中からやけに冷ややかな蔭の音が聞こえた。

それがそこら中に響く。

「・・・わかったよっ」

聞機フテコロを懐に閉まって

再び歩き出そうとしたとき

頭上に、何かが飛んできた。

「きゃあっ！」

びつくりして、思わず甲高い声カンを上げてしまった。

それは、小さな蝙蝠コウモリだった。

「びび・・・びつくりしたっ・・・」

頭を抑えて、自分の頭上を馬鹿にしたように飛ぶ蝙蝠を眺めていたが自分の女みたいな甲高い声に、蘭は顔を赤くした。

「俺は男なんだから！こんなことでいちいちビビッてらんねーの！」

小声でそう自分に言い聞かせ

気を取り直してまた前に進み始めた。

（聞機の電波受信棒立てとなくてよかった・・・誰も聞いてないよな・・・？）

「おらあ！」

こっちは綺麗に舗装された洞窟。

その中を、秦が駆け抜けていく。

たくさん妖に、銀色に光る小太刀を振り回し

一匹ずつ、正確に狩っていく。

「くっそー！無駄に妖多いんだっての！」

お世辞でも広いとは言えない洞窟の中に

嫌というほど妖がいたら、誰だって愚痴くらい零すだろう。

いないもいないで、考え物かもしれないが。

「おい煩！そっちどうだ！？」

耳に当てた聞機から声が返ってくる。

『え？特に。なんも無しだよ。楽チン』

ずいぶんと飄々（ヒョウヒョウ）とした煩の声に

思わず聞機を壊したくなった。

「ちいっ！煩！出口見えたのか？」

『あ・・・それはまだ。でもずつと先に明るい光がちょこつとみえ・

』

「それだ！早く走れ！水晶があるかもしれねえ！急げ」

『え・・・』

「とつとといけっ！！！！」

煩のたらたらぶりに、秦は心なしか大きな声が出た。

聞機の中から「うるさいよぉ」と帰ってくる。

が、秦はそれを見捨て、ぶちんと電波受信棒をきった。

洞窟の中に、駆けていく足音と影だけが残り、映った。

「まったく・・・乱暴だなあ。秦は」

怒り気味に命令された煩は、仕方なく駆け足で走り出した。

「此処走りにくいんだもん・・・」

この洞窟は全てが階段になっていて

ずっと走り続けているのは、体力的にきつい。

「秦の鬼ー。悪魔ー。冷血ー。あんぼんたーん。えーつと・・・」

思いつく悪口を立て続けに並べたが

秦からの返事が無いので、飽きてやめた。

いつもならすぐに反抗してくるくせに。

きつと今は聞機の電波受信棒を切っちゃったんだろう。

そんな事を思いながらとてとてと歩いてみると

光が目の前に来た。

「え・・・？わっ！やった！で・・・でも疲れたあ・・・。

やっぱ悪口言ってたのが体力消費しちゃったのかな・・・」

煩はその場で、がくりと膝から落ちた。

階段に手をつき、肩を上下させ

荒い呼吸を繰り返す。

「はあ・・・はあ・・・っ。・・・？」

煩は目の前の光景に目を見開いた。

「嘘でしょ・・・！！？ちよっ・・・蘭！秦！蔭！聴こえる・・・！！」

「聴こえるわよ。大声出さないで」

煩の問いに真っ先に応えたのが蔭だった。

長い髪は左右にはたはたと素敵に揺れ

かつんかつんと音を響かせて、歩いていた。

「ねえ。他の二人には繋がらないの？」

「うん！出てくれたの蔭だけ」

「ったく・・・あいつら受信棒きりやがったな」

ちつと、蔭が短く舌打ちをする。

「そんな事より大変なの！あのね・・・うわっ」

ザザッ！ガガッ！

おかしいな機械音がして、煩の声がぶつりと途絶えた。

「ちよ・・・煩！大丈夫なの！？返事しなさい！煩っ」

「その声・・・蔭だな？」

蔭は帰ってきた声に目を見開いた。

その声は、他の誰でもない、自分の上官の声だった。

「ざ……斬様……!?!?どうしてっ……?」

「俺もわかんねえんだ。こいつが穴から転がり出てきやがった」

蔭の顔が青ざめるように、心配の色に変わる。

自分の上官は人情が全くといっていいほど無い。

其処にいるのがもし煩だけだったら、煩は妖と同等に

間違いなく殺されるだろう。

蔭は聞機を耳に押し付け固定し、ものすごいスピードで走り出した。

『……おい蔭。聞いてんのか?』

「も……もうしわけありません!あの……お一人のですか……?」

『なわけねえだろ。他のやつらもいる』

ほつと安堵^{アンド}の表情を浮かべ

蔭は、速度を少し緩めた。

『とにかく、ためえも走れ。穴は四つだ。道なりに行きや、出れるはずだ』

「はい!」

そこで斬の声も切れた。

蔭はこのことを報告しようと、秦と蘭の聞機あてに話しかけるが
応えは帰ってこなかった。

「くそっ……。仕方ない……私だけでもこのままいかなくちゃ」

此処に長時間いるのは危険だ。

本能がそう伝えている。

鈍く頭が回転している中で、一点の光が見えた。

あれは……。きつと穴だ。

蔭は両手を大きく広げ、まるでツバサで飛ぶかのように
地を蹴り、進んだ。

「斬様ッ!」

暗闇から出で、真っ先に斬の姿を見つけると

其処に降り立つかのように、足元に駆け寄った。

片方の手は地に着け、もう片方の手は、
立てた片方の膝の上に乗せる。

もう片方の膝は、手と同様地に着けた。

「おそかったじゃねえか」

「申し訳ありません！お許しを」

蔭は頭を深く垂れた。
「ウヘ」

「ふん。まあいい。水晶も手に入ってたしな。

あとの奴らが来たらかえんぞ」

「はっ！」

そして十分後、無表情で入ってきた秦が驚きの表情に顔を変え
すぐさま庵の元へ駆け寄った。

そのすぐ後に、蘭もやってきて

「え？え？なんでなんで？全員いるの？」

と、ほんとに困り果てた顔を見せた。

「おつかえりいっ！」

帰りは、天心甘栗を頼いっぱいに詰め込んだ
なんとも言いようのない凜がむかえでた。

「大変だった？」

「まあな。ところであいつらは？」

庵が自分の髪を手ですきながら言う。

「まーだ！でも、もうすぐ！」

凜の言葉は嘘ではなかった。

「修行、終了！」

第三十三話・操り人形

「結局！式狐は役に立たなかったじゃねーか！

しかも俺らを攻撃してくるしッ！」

柊はぼてつと床に寝転んだ。

ちよつと久しぶりに思える赤い絨毯。気持ちいい。

「あーら、油断は禁物よ。攻撃しないなんて言っていないし！」

なんとも憎たらしい声で、凜が反撃した。

ぬぐぐつとくぐもつた声が、柊の喉から聞こえる。

「にしても、よく凜様にそんな口利けるわねえ」

部屋の隅に、守護組は固まって話をしながら

時折柊を見ていった。

「ほんとじゃ。成長しなくてわしも困っておるのじゃ」

「凜様つてそんなに凄いの？」

輪の中に入っていた麻貴がふと思って聞く。

隣にいた咲も、確かに、と頷いた。

「凄いのつて・・・凄いにきまつてんじゃない！」

陰が声を荒げる。

「いーい？ここに居る五大神は、神々の主神なの！

頂点に立ってんの！分かる？」

「う・・・うん」

麻貴が、陰の迫力にびっくりして、声を小さくする。

「陰。声が大き過ぎ」

「五月蠅い^{ウルサ}わね。仕方ないじゃない」

床に座ったまま、壁にもたれかかっている秦を見る。

見るというより、睨んだ。

「凄いのは分かったけど、なんか凜さんじゃ想像できない・・・」

咲が凜を見た。

柊と口げんかをして、ついにその辺にあったクッションまでもを

投げている。

咲はちよつと苦笑いした。

「じゃあ斬様ならわかるでしょう?」

その苦笑いの咲に、蔭は胸に手を当てて自慢するように誇らしげに言った。

「はあ!? 絶対庵様だろ!？」

「違う違う! 湾様だつ!」

「やっぱ満様でしょ。ここは」

わんわんぎゃんぎゃんと言い始めたので

咲と麻貴は顔を合わせて、また苦笑いをした。

「というか、その、小夜とかいうお姫様を助けなくていいのか?」

凜の傍で、時折柊vs凜の被害を受けながら、音魁は問うた。

「あつ! 忘れてた!」

オイ! お前大丈夫か!?

「よっし! 水晶集まったからもう出発しちゃう!」

「ちよちよちよつと待て! いきなり!? もう!? そんなのあり」

「あり。なんでもあり。だって小説だもん。漫画じゃないもん」

どういう理屈だよ!

こんなギャグ染みた会話を、遠くから庵が見ていた。

「くだらない・・・」

早く行かなければ。

何か嫌な予感がある。

何か、取り返しの付かない事が起こりそうな気がする……………。

周りを黒雲で囲まれた、ひとつの城。
なかはひっそりと静かだった。

ひとつのすすり泣きが響く以外は。

「出して・・・出して・・・此処から・・・出してよ・・・」
大きな牢の中ですすり泣く少女。

「怖い・・・怖いよ・・・。助けて・・・助けて・・・」

肩を震わせて泣く少女が入っている牢を、

豚の形をした妖が壊さんばかりに叩く。

「うるせえな！黙ってる！」

「ひいつ・・・」

少女はそいつから離れるように、後ずさりする。

「そんなに乱暴に扱っちゃいけないよ」

そんな優しい言葉が少女の耳に唐突に入り込んできた。

その瞬間、妖は肉の塊カタマリに変化し

どしゃどしゃと嫌な音を立てて、その場に落ちた。

「あ・・・ああ・・・」

がたがたと手が震えて声も出ない。

「ゴメンね。怖い思いさせたね」

妖を殺した男・冥堂 - は、牢の中の少女・小夜 - に小さく語りかけた。

「嫌ッ！来ないで！いやああ！ひいつ・・・！」

小夜は自分の頭の上におかれた冥堂の手を必死で振り払おうとする。

精神はもうなくなったかのように、闇雲に手と頭を振る。

顔はやせこけ、骨と皮しかないような手。

着ていた綺麗な着物は、ホコリにまみれて、高価なものとは思えない。

「嫌ア・・・もう嫌・・・帰して・・・帰りたい・・・」

「ダメだよ。全く、お姫様ってのはどうしてこう我が儘なのかな・・・？」

そういつて、小夜の小さな頭を鷲づかみにし、持ち上げた。

爪と手がギリギリと食い込む。

頭がそのまま潰されそうになる。

「あがぁ．．．！．．．ご．．．ゴメンなさいっ．．許してえ．．」
「そうだよ。キミは僕に逆らっちゃいけない」
「はい．．．はい．．．っ．．．。ゴメンなさい、ゴメンなさい」
何かの暗示にかけられたように、少女は必死で謝る。
「怖がらなくていい。キミが恐れる事は何も無い」
「は．．．．．いい」

壊れかけた操り人形のような少女を
柊達は救えるのか．．．．．

第三十四話・鬼退治

「でも、行く前に居場所を特定しなくっちゃ!」

凜は、思い出したように立ち上がった。

赤く淡く、薄い羽衣が^{ハゴロモ}ユラユラと揺れる。

そして、乱暴に大きな箱を持ち出し、中を^ゴこそとあさり出した。

「おい……なにしてた?」

「ん?だから、居場所を特定しようと思ってッ」

大きな板に、薄い薄い墨で地図が書かれてある。

これに、凜は自分の手を^{カザ}翳した。

ほかの五大神や守護たちが、引き寄せられるように集まってくる。

「我に力を与えよ、聖域の土地男。我らが敵、冥堂の真の居場所を
全てを悉く砕く光で示せ」^{コトコト}

静かに重い声で、詠唱する。

すると、その手に一本の光が差し、照らすように輝いた。

「土地男……?」

「聖域に住んでいると言われる大男だ。

居場所を特定する術を持っている」

麻貴の疑問に、秦が小声で答えた。

「……ヤバイ……ヤバイヤバイヤバイ」

凜の顔が一気に青ざめた。

翳していた手をぱつと離す。

「おい……どこだ」

斬がもったいぶった凜の態度にイラついて机を叩く。

「……あのね……輪廻の森……」

そこは入ることの許されないただただ深い森。

其処に入ってしまったえば、神だろうがなんだろうが、二度と出てこれない。

しかも、死んで楽になる事すら許されない。

そんなところから、冥堂はこの地に飛んできたというのか。

「あいつは昔っから地理に強かったもんなあ」

「住めるのも領けるが、俺らが其処に行くのは到底不可能だろう？」

湾と満がなにやらしきりに頷いている。

「じゃーさ！柊たちに行かせりゃ済むことじゃん？」

「お前ふざけてるのか？ふざけてんだな？この一大事に？あ？何とか言えコノヤロー」

「はい・・・すいません・・・ふざけてました」

どうやら凜を本気で制する事が出来るのは、満のようだ。

・・・怖いが。

「もたもたしてんじゃねーよ。俺はもう行くからな」

なかなかまとまらない話し合いに、斬は苛立ちを覚えた。

早く行って

敵を切って

斬って斬って斬って斬って

それが自分の唯一の快楽。

「もーッ！斬が急かすからあたしまで行く羽目になったじゃーん！」

自分は危険地帯に乗り込まないつもりだったらしい。

凜が腰に手をあてて、頬を膨らませた。

もう分かっていると思うが、あまり可愛くは無い。

五大神は、話が付いたので

眠っていた守護の頬に雷雲を用意させた。

「もう行くのか？」

改めて戦闘衣装に身を包んだ柊が、頬に聞く。

「多分。凜様が用意しろと言ったので」

今まで寝ていた煩の頭には、寝癖が付いていた。

白い髪の上のほうに、ちゃんと立った髪の毛。

それはまるで、猫耳のようだった。

「おい・・・お前寝癖が・・・」

「ふえい？あ、ほんとーだ」

何度も手で直そうとするが直らなかった。

「もういいや。これで」

そのうち、煩はあきらめてしまった。

そして、寝癖の事なんかもう忘れたというように

煩の体が南へすつと向いた。

「来い」

大きくて丸い目を細くして、水晶玉が口ザリオと共に手甲に付いているほうの

手を、北へ向けた。

遠くで疾風シッブウが巻き起こるのが見える。

と、疾風が見えた瞬間、大きな広間の中に、一匹の巨大な猫が現れた。

毛並みは黄色と薄く白が混ざっている。

足の四本には全て、雷雲が巻きついたようにある。

『我を呼んだか・・・何百年ぶりだろうか、煩』

「えへへッ。だってこの百年間くらい穏やかだったけど

凜様の力の持ち主も発見されたし、冥堂にもあつたし。

この頃色々大変なんだー。だからさ、銘銘メイメイ、雷雲布頼ライウンフむよ」

銘銘と呼ばれた猫ははあと溜息をついた。

『これだから我の主は・・・』

「こんな僕がいて、銘銘がいて、丁度いいの！」

ね？と笑って、煩はウィンクして見せた。

『仕方あるまい』

渋々承知した銘銘は、ふっとレポートのように外に出て天高くを見上げた。

青い空が見る見るうちに、黒雲に変わっていく。

そして雷がバリバリと降ってきた。

「きゃあ！」

咲は驚いて、隣にいた柊にしがみ付いた。

二回目の事だから慣れたし、なにより猫に見入っていた。

「ありがとー。銘銘ッ！」

煩がぺこりと頭を下げる。

『簡単な事だ。礼などいらん』

自分より遥かに大きな化け猫に抱きつくと、

煩は銘銘に飛び乗った。

「俺らはこっちか・・・？」

柊が大きな黒雲をみる。

「銘銘は煩以外を背中に乗せるのを嫌うのじゃ。

^{カタク}頑なに拒まれるぞ」

「これは守護の中で煩にしか使えない技よ。

この点だけで見れば、煩はずば抜けてエリートね」

凜がちよつと補足した。

「じゃ、行こうか！鬼の首を取りに！」

第三十五話・闇ルートへの入り口

雷雲布は思ったよりふわふわしていたが
ずぼりと落ちるような欠陥品でもなかった。

「私雲に乗るのが夢だったのーっ」

なんとも子供染みた咲の夢だが

柊はあえてつつこまなかった。

前をいく煩は特徴のある少し長めの耳を頼りに
輪廻の森を探していた。

『あつたか？』

「うーん」

きよろきよろとあたりを見回す。

ただっぴろい森ばかりで、柊たちには見分けが付かない。

御殿はもう見えなくなっている。

「あーっ！あつたあつたありました！」

突然に煩が叫ぶ。

その指差す方向には、やっぱりただの森。

「ただの森ではないのか？」

「やだ音魁。分かんないの？此処・・・此処、妖気が激しい・・・
！！」

音魁は凜に訊ねたが、その言葉をさえぎり

柊が大声をあげた。

此処、おかしい。

こんなところに居られない。

飲み込まれる。

飲み込まれそうだ。

この汚い気に。

「でも柊、凄いわね。気づくの早い」

凜が惜しめない拍手を送る。

『我は此処には入れん。こんな主を送り出すのは心配だが……』
輪廻の森の真上にたつて、大きな城を見下ろしていた銘銘が
心配そうに呟いた。

天守閣に聳える、悪魔の姿を模った象が
金箔の所為か、まぶしく見える。

「もう！銘銘は心配性だっ！」

『我の力はこの中では一切つかえん。だからせめて……』

銘銘は、躊躇うようにして、煩を自分の背からどけ、
雷雲布へと移した。

『この邪魔な外部だけでも、壊しておく……！』
稲妻が走った。

縦横無尽に城を目掛け、轟きながら雷鳴を鳴らす。

咲が今度は、隣に居た凜に抱きついた。

『フン。こんなものか。では気をつけるのだぞ、主』

最後の最後まで煩を心配して、銘銘は闇へと溶けた。

「……ありがと。銘銘。絶対無事で帰ってくるから、心配しないで・
・・」

心配性のキミを、困らせるわけにはいかないから……。

外壁も、天守閣も壊れたが

中から何一つ見つからない。

「こりゃ……地下だな」

湾がめんどくさそうに息を吐く。

地に降り立った一同は、隅々まで中を調べたが、何も無かった。

「地下への入り口を、探さなければいけないという事ですか？」

湾の傍らにいた蘭が散らばった破片を見つめ、踏み潰しながら言った。

破片はもろく、すぐにぼろぼろになった。

（・・・これは、ダミーか？・・・）

蘭が他のものも踏んでみる。

何もかもがもろかった。

「湾様。これはダミーでは無いでしょうか？ほら」

足元に崩れた破片をかき集め、蘭が掌に乗せて
みんなに見えるように持ち上げる。

「そうだな、とすると「地下への入り口はわかってるわ！」

突然凜が口を開いた。

ちよつとかつこつけてもたれ掛かっている。

それは、大きな鉄扉テッピだった。

「これか？」

斬が鉄扉を見る。

「そーよ！だつてほら、階段があるもの」

ぎぎぎぎと古い音で鉄扉が開く。

中には、無駄に長い階段があつた。

「行くしかねーな」

一同は、暗闇の中へ一歩ずつ降りていった。

第三十六話・潜入

暗闇には篝火が照らされていた。カカリビ

しかし妖は何処にもおらず、まさに「ウエルカム」状態だった。階段は延々と続き、時に足を滑らせながら

一同は下へ下へと降りていった。

そして、やっと階段がなくなった頃。

「あ！」

咲が叫び、一步退いた。

其処には夥しい数の妖が待ち受けていた。オビタダ

大きなものや小さいもの。姿形は様々だ。

そして奴らが守っているのは、これまた鉄扉だった。

きつとその向こうに、囚われの姫が嘆きながら助けを求めているはずだ。

「どけっ！」

水晶を振りかざして、柊が叫ぶ。

「五十嵐！」

柊の手から、突風が巻き起こる。

そして周りにいた奴らを跳ね除け、鉄扉に手を滑り込ませた。そのまま鉄扉を開こうとするが、また妖が襲ってくる。

「どきなさいよおーっ！」

後ろから大きな声が響く。

髪を振り乱した咲が、鬼のような形相でこちらを見ている。

「え？」

「どけって言ってるのよっ！バカ柊ッ！」

それを言うやいなや、咲の髪が鋭い矛となって飛んできた。爆発音に近い音が広い地下の隅々まで響き、反響してくる。

「行くわよ！柊っ」

「お・・・おう」

その後に麻貴と音魁もつづいた。
が、凜たち神は入れなかった。

「結界かー。小ざかしいマネしてくれるわ。よし千代！あんたはあいつらについて！」

「ええ！？私・・・入れない・・・いいから！早く！結界解除したらあたしらもいく！」

半ば無理やりに、千代は結界の向こうへ押し込まれた。
むぎやうつと変な声が聞こえる。

「千代！行くぞっ」

千代は、柊の後を急ぐように追った。

まるで実験室だった。

コンクリートで固められたような部屋が「1-A」「2-F」などと並べられている。

「一部屋ずつまわる？」

麻貴の提案でみんなが同意し、一部屋ずつ順番に回ることにした。

どの部屋もおかしなところばかりで

人一人もいないのに、実験器具が所狭しと並べられていた。

「へーんなの」

咲が器具をいじりながら、あたりを見回した。

そして防犯のカメラがあることに気づく。

「壊しとこっか」

がしゃんと音を立てて、わずか0.07秒でカメラが崩れる。

「私達が来た事はもう向こうは知ってるっぽいね。」

でも攻撃してこないわ？なんでだろう？」

柊達は慎重に回ることを考え、すぐにその部屋を出た。

「・・・フフフ。やっと来たんだ」

奥では、悪魔が嬉しそうに笑う声だけが、聞こえた。
そして囚われの姫は、まだ牢の中に、閉じこめられていたのだ。

第三十七話・墮ちた姫

真っ直ぐに歩くと行き止まり。

「どーするよ」

「真っ直ぐ行くしかないでしょ」

「しかし行き止まりだ」

「でも他に方法ないよ」

「真っ直ぐでいいじゃろ」

五人は行き止まりの壁を見つめて話し合っていた。

一見何もなさそうなただの壁。
と、五人とも思っていた。

「ったくよー。俺こーゆー迷路とか苦手なんだよなあ」

ぶつぶつとなにか言いながら、柊が壁にもたれかかる。

もたれかかったと思った瞬間、くるりと反転し、後ろへ倒れた。

「スイッチがあつたんじゃな」

「ま・・・マジでか・・・」

ごてんと倒れた柊が、頭を抑えてきよろきよろとあたりを見回す。
すると

「あ・・・あれって」

咲の驚きの声が頭の上から降ってきた。

「小夜・・・姫・・・？」

セミロングで、ブリーチされた栗色の髪。

フリルがついた、ピンク色の素敵なドレス。

「だ・・・れ・・・？」

とても日本の姫には見えないが、この子を見たことがある。
小夜だ。

「小夜様・・・ッ」

顔はやつれて、手もボロボロ。

髪はぐしゃぐしゃと乱れ、もう何ヶ月もお風呂に入っていないみた
いだ。

「あなた・・・千代・・・？」

「ええ！私めは千代にございます！」

千代は小夜が監禁されている牢をがしやと鳴らした。

「わ・・・私っ・・・。貴方の・・・姉なの・・・」

唐突に小夜が、千代の姉であることを暴露した。

これには柊たちも驚いた。

しかし一番驚いたのは、やはり千代であつて

「え・・・？」

「ゴメンなさい。私なんかより、貴方のほうが王家に相應フサワしいわ」
ぼろぼろと涙を零しながら、小夜は泣き崩れる。

「私・・・あの生活がイヤでイヤで・・・だから・・・冥堂の甘言に乗
せられちゃつて・・・」

これはアレだ。よく姫様にある豪邸の暮らしがイヤつてやつだ。

その気持ちは、柊たちには到底わからない。

「だから・・・だから・・・」

「もういいですよ、姫様。悪いのは奴です。さ、もう帰りましょ」

千代の優しい言葉に、はつと顔を上げた小夜の顔が

歡喜の表情に変わる。

「ありがとう・・・千代・・・ッ・・・わたし・・・わたし・・・」

その時、一瞬怪しげな笑みを浮べたのを、柊は見逃さなかった。

「逃げる！千代ーーーーっ！」

腹部に重い痛みが走った。

なんだこれは

熱い液体が、腹部から赤黒く落ちていく。

え？

これは何？

痛い。それに何か腹に突き刺さっている？

それは……

「私これで、迷い無く貴方を殺せるわ」

柊たちの目に映ったのは

小夜の細い腕が、千代の腹部を深々と貫いている

まさに裏切りに近い形だった。

「千代おおおおお————ッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

第三十八話・傀儡

これが夢だったらいいのに。
幻だったらよかったのに。

そう思うのは、いけないことなのですか……？

「千代おおーッ！」

大量の血が滴り、肉が抉^{エケ}られた。

千代はぴくりとも動かない。

「うふふ……あははははは！」

千代の体に深々と自分の腕を刺したまま、小夜は高らかに笑った。

「てめえ……！」

「まったく……簡単に騙されちゃって！私はね、もう立派な冥堂様の部下なのよ！」

あの方のおかげで素敵な力も手に入れたわ！まあ最初は嫌だったんだけど

なんであんなに文句ばかり言ってたのか……。私もバカだったわね。あの頃は」

ずぶりと千代の体から腕を抜いた。

動く事も無い小さな体は、地にぶつかる前に音魁によって受け止められる。

「……取引しない？」

「え？」

小夜は其処から動くことなく、千代の小さな体を尻目に高々と言いつ放った。

「その子をこっちに渡して。そしたらあなたたちは無傷で帰してあげる」

「……………ヤダね」

柊が応えた。

小夜の眉がぴくりと動く。眉間にしわが刻まれた。

そして、その細い手が何かを操るようによくいくいと動く。

瞬間、小夜の後ろにはすでに死んでいる人間が並べられていた。

「なっ・・・!？」

咲がその人間を睨みつける。

「人間傀儡。^{ニンゲンクグツ}私の力よ」

「酷い・・・・・・」

確かにそれは酷かった。生身の人間に無理やり針を突き刺しているようだった。

「あらどうして？こいつらは死んだ人間よ。生きてるわけじゃないわ」

くすりと怪しく笑うと、右手を振り上げ薬指と親指を上下に振った。最前列にいたおだんご頭の中国人の少女が大きな日本刀を振り回しながら

柊たちに迫ってきた。

「この子はね、人身売買の取引に使われそうになったの。

でもそれは行われなかった。なぜか？それはこの子が取引の人間を全て殺しちゃったからよ！」

その少女は小夜に操られるがまま、柊たちに闇雲に突っ込み

切り傷を負わせていく。

「そのあとこの子は考えたわ。ああ、私は何故生きているのか。穢^{ケガ}れない無垢^{ムク}な少女でいたかったのに。

そしてその子はどうしたと思う？・・・・・・自害したのよ！自分の喉笛を切り裂いて！」

柊は小夜の笑い声に耳を貸さず、その少女を止めようと手を翳した。麻貴がチェーンを握る。リウの眼が真紅になった。

咲の髪は先ほどから大きく乱れ、怒りで我を忘れそうになるのを必死に止めていた。

音魁は千代の腹にできた穴を自分の造った治癒の技でどうにか直そ

うと

止血をしていた。

「・・・・・・・・私の話、聞いてた？」

小夜の機嫌が悪くなる。

それは、柊がばりばり無視していたからだ。

「聞きなさいよお！！！」

きゅん。

風を切る音が聞こえた。

小夜の表情が固まる。

「俺、人の話聞くの、苦手なんだよねえ」

「で、なんだって？」

小夜の顔が、醜くゆがんだ。

第三十九話・心を保った傀儡の少女

小夜が大きく手を揺すった。

傀儡はみな後ずさりし、小夜も消えるように下がった。
と、思われた。

「！」

音魁の腕の中にいたはずの千代が忽然と消えている。

「千代……!？」

「この子は冥堂様の実験体らせて貰うわね。無駄な努力、ごくろ
ーさま」

その場から動けなくて悔しそうにしている柊たちを、
面白くて面白くて仕方ないという様子で、小夜はまた笑った。

「……千代……」

その場にがくりと崩れ落ちた。

何故こんな事になったのだ。

「千代ッ……」

何故だ何故だ何故だ!？

柊は自分の頭を壁に打ち付けた。

額が割れる。血が流れる。

かまわない。

「千代お……」

なくしたくなかった。

当然のむくいだ。

「何でだよ……」

大切な仲間だったのに。

すべての始まりは、あいつからだったんだ。

泣き崩れる四人の傍に、傀儡がひとつ転がっていた。

それは先ほどの中国人系の少女だった。

泣かナイでクダサイ・・・・・・・・・・

「え？」

あナタ達の仲間は、まだ取り戻せマス

「だ・・・誰？」

麻貴があたりを見回した。

目に留まったのは、転がっている傀儡。

「キミ・・・・・・・・？」

ハイ。あたいはリーメイ

少女は答えを返してきた。

「キミは・・・・・・・・小夜の部下じゃないの・・・・・・・・？」

イイエ。強制デス。でもあたいは・・・・・・・・自分の心を信じてタカラ・

「そつか、強いんだね」

リーメイの表情は変わらないが、声が嬉しそうに笑った。

滅相もナイ。・・そうだ、あたいの首の後ろの金具、トツテいた
だけマスカ？

麻貴は恐る恐るリーメイに近づき、

首の後ろにあつた金具を抜き取った。

とたんに、命が吹き込まれたようにリーメイが起き上がった。

「ありがとうござえマス！これであたいも自由でス！」

起き上がったリーメイは、何度も何度も麻貴に頭を下げた。

それを見ていた柊たちが、集まる。

「お礼に、アナタたちの仲間サン助けます。協力させてクダサイ！」

頭の髪飾りが、しゃりりとなった。

その音で、千代の簪を思い出した。

「わかった。一緒に千代を助けてくれるか・・・・・・・・？」

「もちろんでござえマスッ!!!」

リーメイが、日本刀を持ち直し、笑った。

第四十話・籠と鳥

四人とリーメイは歩き出した。

この地下の地形に詳しいリーメイが、四人を先導した。

「おい・・・おい柎！」

小声で、音魁が柎を呼び止める。

「なんだ？」

「あの女。ホントに入れてよかったのか？もしかしたら小夜の手下かもしれないぞ」

それはありうる事態だった。

もしかしたらリーメイは芝居をしているだけで、

本当は小夜の命令でこんな事をやっているのかもしれない。
でも

「大丈夫。きっと大丈夫」

音魁に言い聞かせるように、自分に言い聞かせるように、柎は断言した。

「それにさ、もしそんな事があつたら、俺があの子を倒すから」

迷いは無い。

迷ってなんかいられない。

進まなくっちゃ。一歩でも先を目指して、光を目指して。

迷いは、無い。

鳥になりたいと思った。

そこはまるで籠^{カゴ}だった。

大きな大きな、籠。

そこから出る事は許されず、結婚相手も決まっ
ていて、

何一つ自由が得られない束縛の空間。

出たかった。

自由が欲しかった。

どう足掻^{アガ}いても、変わらない運命。
だけど

「一緒に来ませんか？お姫様」

その一言が、私の世界を、私を変えた。

此処から出たい。籠の外へ。自由になりたい。

あの青い空を優雅に、自由に弧を描いて飛ぶ、あの鳥のように。

あの人が全てを変えた。

あの人が私を助けてくれた。

だから私は決めたんだ。

あの人の、力になると・・・・・・・・・・。

「はぁ・・・はぁッ・・・」

暗い畳の部屋に、荒く息をする声とぱたぱたと走る音が聞こえる。
襖^{フスマ}を開けては閉め、暗証番号を打ち込んでいく。

「つく・・・はぁ・・・はぁぁ・・・」

肩を大きく上下させる。

片手には小さな少女を抱えて。

そのうち死んでしまうかと思ったが、あの髪の長い少年の治癒で
みるみるうちに傷口からの出血は止まった。

「っ・・・七・・・七・・・一・・・」

最後の暗証番号を、正確に、いち早く打ち込む。

襖の音とは思えない「がしゃ」と金属が擦れるような音がして
その襖は開いた。

中はまるで実験室のようだった。

蛇やモルモットが宙ぶらりん吊るされ、

こぼこぼと不思議な音をたてるガラス瓶の中には、小さな犬が押し込められていた。

「冥堂様！」

その奇怪な空間の中に、そいつはいた。

右目だけを、長い髪で覆い、ただただ黒い羽織を肩に適当にぶら下げていた。

「お帰り・・・小夜。どうだった」

「は・・・はい。手に入れました・・・」

手を差し出す。

「輪廻の少女です」

その言葉を聴いた瞬間、冥堂の口が大きくにたつと笑った。
愛おしそくに、千代の髪を撫でる。

「会いたかったよ・・・。僕の力は・・・きつとこの中に・・・」
「ばしゃん！」

はねる水音がした。

千代が、大きな水槽に投げ入れられた、まさにその音だった。
うねうねと当てもなく中で彷徨っていた大量のチューブが
千代の体を支配しようと蠢き、吸盤のようにひつつく。

口には酸素マスクのようなものが宛がわれた。

「さあ・・・僕のために・・・その神秘なる力を・・・全て頂戴・・・」

第四十一話・手を伸ばして

大きな廊下に、歩く音だけが響いた。

「こつちデス」

こいこいと、リーメイが手招きする。

そこは大きな書院造の部屋だった。

「ひろーい・・・」

咲がおもわず声を漏らす。

その瞬間、ふっと口の上に手が置かれた。

「!？」

「しっ！静カニ」

リーメイが咲の口の上に手を置いたまま、辺りを見回す。

気を集中させると、視線を感じた。

「・・・五体・・・」

ひゅん。

風が通り過ぎる音が、咲の耳にいち早く届いた。

金属音を立てて、日本刀が鞘から抜刀される。

そして・・・

「ふいー」

リーメイのおかしな声が聞こえたかと思うと

視線を感じさせていた妖たちは、ただの肉の塊カタマリになっていた。

「よし！だいじょぶデス！ケガないデスカ？」

にこりとわらって、振り向く。

日本刀はもう鞘の中にその身を潜め、リーメイの中華風の服には似合わないが

腰の横に差し込まれていた。

「は・・・はえ・・・」

神業とっていいかもしれない。

その力は凄かった。スピードなんか目で追えないくらい速い。

「さ、行きましょう！」

リーメイが、その細い指を、暗証番号を打ち込むキーボードに向けられた。

その頃、結界が解除できた五大神たちは・・・

自分の守護を引きつれ、皆々単独行動を行っていた。

柊たちは幸い会わなかったが、この地下にもたくさんの魑魅魍魎チミモウリョウがいる。

大方雑魚だが、それを狩っていた。

「庵様・・・。此处、少し変です・・・。まるで我々を嫌悪しているみたいな空気が・・・」

胸を押さえて、秦が訴える。

そんな秦の言葉に耳も貸さず、庵は自分の掌から技を発動させていた。

大量の水が、標的を飲み込み悲鳴を上げさせる。

「庵様・・・？」

「黙っている、秦。我々を嫌悪するのは当たり前だろう」

秦が言葉をなくして、黙り込む。

その肩に、何かを感じた。

それは庵の技の擬人化、オアだった。

水のように冷たい手はなぜか温かく感じる。

『我々は冥堂を嫌悪する。だから、冥堂も我々を嫌悪するのです』

「・・・」

かたかたかた・・・

「まだなの？」

麻貴の声。

「もーちよつと！ほら開きました！やっぱり七七一四五零六三八八

三四であつてた！」

凄い数の数字を、リーメイはぺらっと言つてのけた。

襖とは思えない金属音で、扉が開く。

リーメイが飛ぶように走り出した。

その後を四人が続く。

「此処を三十六回抜けたら、冥堂の実験室につくんデス。そこに、きつとあなた達の仲間サンはいるはずデスッ！」

もう少し、手を伸ばしてみなきゃ。取り戻すためには。

第四十二話・対決

ここはどこだろう

真っ暗だ

何も無い

怖い

自分はどうなってしまうのだろう

ごぼ・・ごぼ・・

水の中で息をするような音だけが、広い空間に響く。

ホルマリン漬けにされている、まだ死んではない少女。

ぽちゃぽちゃ音を立てて落ちるホルマリン液に、深く漬けられていた。

その様子を見て、喉の奥から低い声を出して笑う男。

男の傍にいる少女も、小さな口をにたりと吊り上げた。

部屋には、赤い点がたくさんついていた。

そして、少女と男にも。

屍が数多く転がり、腐敗臭を放つ中

少女と男は、ホルマリン液の中にいる少女だけを、静かに見ていた。

がたん。

静寂が、打ち破られた。

少女が五月蠅そうに目を向ける。

椅子が傾き、地に転がっている先に、白い服を着た男がいた。

腹からはどくどくと赤黒い血が流れる。

「お・・・まえら・・ッ・・」

何かを言おうと必死で口を開ける。

しかしその口から出てきたのは言葉ではなく、多量の血だった。

「がはあああ……」

「五月蠅いわね。死に損ないのくせに」

くいくいと、少女が指を動かす。

何時の間にか、男の後ろには少女の愛用の傀儡がずらりと肩をそろえて並んでいた。

しゅ。何かを示すように指を動かした。

瞬間、男は切り裂きジャックに裂かれたように、死んだ。

「そこまでだ！！！！」

ばたん！！

大きな音がして、鉄扉が開く。

そこに立っていたのは、五人の人間。

「……次から次へと、鬱陶しいわね」

部屋の真ん中に立っていた少女・小夜・が、目を細めた。

視線の先にあるのは、リーメイ。

「あんた、そっち側についたんだ？」

「もともとアンタの所にいる気はないネ」

リーメイは日本刀を手取る。傀儡用に縫い付けられていた針の痕がずきりと痛む。

バックアップするように、咲と麻貴が、リーメイに付いた。

終と音魁は黙ったまま、小夜を睨む。

「死んで頂戴！」

「こっちの台詞だ！」

二人は同時に手を伸ばし、互いを捕らえた。

ぐぐぐ……と、わなわな震えながら攻撃を繰り返そうとする。

先に手を出したのは、小夜だった。

傀儡は指が空いていれば使える。

右手の親指と、左手の薬指を、同時に裂くようにひいた。

がしゃがしゃと傀儡音がしてリーメイの背後に傀儡が回る。
とたんに、背中が裂かれた。

「あぐう・・・！」

「リーメイさん！」

急いで傀儡を壊すが、リーメイに付いた傷は深かった。

「バカね。その辺の奴らと一緒にしないで」

「バカはお前ダ！堕ちた姫！」

リーメイが、自分の刀を抜刀した。

小夜と距離をとる。

そして

「集まれ集まれ、雲の如く。離れ離れ、雨の如く」

その日本刀を、天に突き上げた。

日本刀の周りに、白い気が集まり、離れるように解けた。

「覚悟しろ！」

リーメイの日本刀が、小夜の胸を貫いた。

第四十三話・ショータイム

「そ．．んな．．．」

深々と胸を刺された小夜は、その場に崩れ落ちるように倒れた。引き抜いた日本刀には、べったりと赤い血が絡み付いていた。笛のような、ひゅうひゅうという音が、小夜の喉から出される。

「勝負あつたナ」

「ふ．．ふざけたこと言ってんじゃないわよ．．．」

まだ指は動く。傀儡の代わりだつて何体もある。

この命と引き換えに、この女を殺すことだつて．．．

「！？」

突然胸が苦しくなった。

何かが染み渡ってくる。これは．．．

「そう、毒ダ」

冷たく言い放つたリーメイを、小夜は睨みつける。

「迂闊だったナ。あたいはイツモ、この刀二多量の毒ヲぬってアル」
悠々と話しているリーメイの隙を窺い、小夜はぱつと指を動かした。後ろで待機していた人間傀儡が、音も立てずに忍び寄る。が、それはただの悪あがきにしかならなかった。

目にも止まらぬ速さで、リーメイは傀儡を壊したからだ。

「な．．！？」

「あたいの生前をお忘れカイ？人身売買のマフィアを一度に殺した
ハンター
狩獵サ！」

もうきつと助かるすべは無い。

なら、最後の悪あがきでもいい。きつとあなたは助けてくれるはず。

「みよ．．ど．．さま．．．」

震える手で、小夜は冥堂に向かって手を伸ばした。

「ごめ．．なさい．．お役に．．たてな．．て．．」

冥堂は静かにそれを見下ろした。

自分のために傷ついた少女。

それでも、

助ける気は

無い。

「キミはもう要らない」

「え．．．．」

小夜の最後の言葉は、それだった。

その場にかくりと倒れ込み、息を引き取った。

「キミはやっぱり、籠の中にいるほうが、お似合いだ．．．」

「てめええええええー！ー！ー！ーッ！！」

その瞬間、柊の怒りが爆発した。

もの凄いスピードで、冥堂に襲い掛かる。

「ふざけんな！仲間じゃねえのかよ！？」

凄じ剣幕で怒鳴りつける。

それでも冥堂はびくともしない。

しないどころか、冷たい視線を柊に向ける。

「キミのこと結構楽しみにしてたのに、結局それか．．．」

ヒーロー気取るのはやめてくれないかな。いつもそんな言葉ばかり。人間って無能だね。

あの子は仲間と思っていただろうけど、僕はなんとも思っていない。

死にそこないは、ただのゴミ。助ける必要があるかい？それに、キミ達からしても、あの子は敵だった。何故助けるなんていえるのか、僕には分からないよ」

冥堂の心無い言葉が柊に降りかかる。
そして

気づかぬうちに、柊は風圧かなにかで飛ばされていた。

「あぐ！」

壁にぶつかる。

「柊！！」

「キミと僕のショータイムの始まりだ。観客が少ないのが、残念だね・・・」

第四十四部・危機！！

風圧で飛ばされた柊は、それで気を失った。

「柊！柊い！」

起きない柊を、咲が揺さぶる。

ぴくりともしない。

「ふざけんじゃないわよ！」

ぱん！

咲の平手打ちが、柊に直撃した。

ぱんぱんぱん！！

「咲ちゃ・・・」

「黙ってな！麻貴ッ！」

後ろで咲の往復ビンタが続く中、

音魁とリーメイは、冥堂をふさいでいた。

「お前は俺が殺す」

「此処からはいかせません！」

自分の持っていた扇子を、据えた目で冥堂に向ける。

冥堂が薄く笑った。

挑発と分かっていたが、今の音魁は頭に血が上っていたため、
ぱつと扇子を開いた。

そしてもう一度閉じ、冥堂に向かって走り出した。

リーメイが今度はバックアップに回る。

「うおおおおおおおおお！！」

閉じた扇子をまた開き、縦横に振った。

音の刃が飛び出す。

「二の舞！音刃オンジン！！！」

ただ標的を捉え、まっすぐにそれは飛び立った。

金色に煌き、冥堂の腹にぐさりと刺さった。

冥堂の口から多量の血が吐き出される。

それを狙って、リーメイも冥堂の腹に日本刀を押し込めた。
しかし

「え・・・??」

悲鳴も上げなければ、苦しそうな表情もしない。

苦しそうな表情どころか、にたりと笑い始めた。

「ふふふ・・・あははははは！こんなものか！キミ達の力は！」
体を弓なりに反らして笑い始める。

そのおかしい現状に、音魁もリーメイも手が出せない。

「みそこなっ た」

体に痛みが走った。

鈍い痛み。

ずきずきと頭と脇腹が痛む。

「地獄」

地がゆがんだ。

ゆがみ、大きな手が現れ、二人を捕らえた。

「うぐう・・・」

「あああ・・・」

爪でがりがりとして引っかき、苦しみもがく。

「さよなら。キミ達はいらない」

どがあああああ！！！！

地からはえた手が真つ二つに割れた。

「！！？」

呼吸困難で二人は崩れ落ちた。

「はあ・・・はあ・・・！！」

二人が顔を上げると、そこには

手を軸に、苦しそうに呼吸をする柊だった。

「ひいら．．ぎ」

「柊サン．．．」

「俺の仲間を傷つけた罪は重いぜ！クソヤロー！」

第四十五話・幼女 少女

冥堂の顔が歪んだ。

「ワザと？」

柊の顔も一緒に歪んだ。

「あ？どーゆーことだ？」

「僕がそういう言葉、嫌いなもの知ってて言ってるの・・・？」

一瞬言っている意味が分からなかったが、

ようやく理解して、掌にぼんと拳を置いたのも、つかの間。

「水獄」

冥堂が叫ぶ。

柊の手に、腕に、みるみるうちに水が巻きつき、飲み込んだ。
水の牢獄が完成している。

「どど・・・どうしてえ！？水って・・・俺の技じゃないの！？」

麻貴が目丸くして叫ぶ。

繰り出そうとしたチェーリングを手で握り踏みとどまる。

「僕は土・水・火・風・光。すべての技を使えるのさ」
種を明かした冥堂の言葉に、咲が後ずさる。

しかし後ずさりなんかしても仕方ない。

「五月蠅いわねッ・・・！柊を離しなさいよお！」

神の矛先が乱れ飛ぶ。

それはひとつも冥堂にあたらないし、かすりもしない。

「がばおお・・・」

息が出来ない。

息が・・・。

苦しい・・・！

はっと顔を上げた。

そこに映ったのは、ホルマリンの中にいる千代だった。若干身長が伸びたように見えるが、それは今関係ない。千代は自分よりずっと長く息の出来ない空間にいる。

それを助けてやるために来たのだ。

こんなところで、

こんなところで

「こんなところで死ねるかああああー！！！」

水の中でいるのであまり綺麗に聴こえなかったが、

咲と麻貴、音魁とリーメイには柵の気持ち伝わった。

「くそ・・・いけえええ！」

音刃が、音魁の扇子から飛び出した。

水獄を真つ二つに切り、ばしゃああと水が吹き飛んだ。

「なに！？」

「ぷあ・・・ありがとよ音魁い！」

水で濡れた着物は、ずるりと重くなっていた。

だが、動くには問題ない。

「覚悟しやがれえええー！」

風が巻き起こる。

怒りとともに。

気持ちとともに。

相殺されたその気持ちは、それくらいで緩むものではない。

「相打ち・・・！」

空中で半回転し、ふたりは着地した。

そしてまた相手を目掛け走り出す。

「炎獄！」

「五十嵐！」

水蒸気と、火の粉と、風に舞ってあたりに散る。

「おらぁああ！」

ひゅん。

一発の風が冥堂の頬を掠った。

「・・・」

赤い液体がぼたりと落ちる。

「相打ち・・・？これで？・・・ふざけるなよ・・・。お前如きが僕にかなうわけない！！！！！」

ごぼお・・・。

柊の耳に空気と水が混じった音が聞こえた。

「え？」

ごぼごぼごぼ！！

びきびきびき！！

「なあ！！！！？」

千代の体が、みるみるうちに大きくなっていく。

そして最後には、チューブがぶつりと離れてしまった。

「ウソ・・・」

それは、しいていうなら十七歳の少女だった。

幼女なんかじゃない、立派な少女。

「・・・面白い・・・」

冥堂の言葉に、柊はもう一度大きく、拳を握り締めた。

第四十六部・最後

この世は自分のためにある。

そう考えたって、悪くは無いと思うよ。

だって、力がモノを言うんだから。

「面白い・・・だとお？」

「うん。面白いじゃない」

にたりと、晒った。

「この、玩具」
オモチャ

その言葉に、柊は頭にかつと血が上り構えもせずに走り出した。

「考え無しに突っ込んだじゃだめデス！」

案の定、柊は冥堂の羽織がはためき飛ばされ、それをリーメイがぱしと受け止めた。

「落ち着くネ！」

「うるっせえー！千代の事を・・・玩具って言ったんだぞ！？」

「気持ちは分かりマスッ！デモ落ち着いて！」

ばたばたと暴れる柊は、その細いリーメイの腕からするりと抜け出した。

抜け出したが、何かに蹴躓ケツマズいて転んだ。

「わたし？」

ちやりちやりと金属音がする。

鎖・・・いや、それはチェーンだった。

龍が彫られてある、チェーンだった。

「てめ！麻貴なにしゃがんだあ！バカ！」

「バカは柊くんだー！」

いつもにこにこしてて、何を言っても怒らない麻貴が、本気で怒っている様を見て、柊はおるか咲も音魁も驚いた。

「まき・・・」

「バカァー！そんなんで千代ちゃん助けられないよ！」

「柊くん・・・覚悟が弱いんだ！だからあんな挑発にキレちゃうんだ！」

柊の胸を、麻貴が力いっぱい叩く。

目からは、ぼろぼろと涙がこぼれる。

覚悟が弱い。

確かにそうかもしれない。

もうちよつとなのに、自分は何してんだ。

「そ・・・だな」

はつと顔を上げる麻貴。

まだ涙は流れ落ちている。

「悪かった。麻貴・・・。俺、今度は絶対ヘマしないから・・・」

麻貴の顔が、ホコロ綻んだ。

「絶対だよ・・・約束だよ・・・破ったら・・・もう一回叩くからね・・・！」

「ああ！約束だ！」

「与太話は終わったかい？まあそれがきみの鎮魂歌レクイエムなんだけどね。もう少しゆっくり話をさせてあげようか？」

ばきばきと指をならして歩いてくる柊。

「れくいえむ？なんだそりゃ。ああ、鎮魂歌って書くやつね？あつてる？」

俺国語結構得意だから、自信あるんだよねー」

にかーっと笑う。

おちゃらけているのだが、まわりを取り巻く不陰気が強く堅い。鋼のように。

「うん。合ってるよ、よかったね。これがキミの最終問題だからね」

ニコツと笑う。

が、その瞬間ぱつと消えた。

柊の後ろに回りこむ。

「さよなら」

フウケツカイ

「風結界！」

柊の周りに、風の結界ができる。

かきーんと弾ける音がして、冥堂の光の剣が壊れた。

冥堂の頬から血が流れる。それをぺろりと舐める。

「最後まで最後ってうるせーな。じゃ、それがテメーの最後の晩餐だよ。

冥堂！」

第四十七話・激戦

滴る赤い雫は、音も立てずに飲み込まれた。

常人からみて少し色が薄い舌で、冥堂は滴る血を舐め取った。

「晚餐ねえ・・・」

優しく、黒く微笑む。

「キミは残念だね。きっと昨日食べたものが晚餐だよ。味わって食べたい？」

「ざーんねん！俺は味わって食べるタイプじゃないんでね」

二人同時に動いた。

早くて、目で捉えられないくらい。

冥堂の剣は光となり、また現れた。

風結界を造っている暇は無い。賭けで行こう。一か八か。

「このさい凜でいいや・・・。神様ー！俺に力をー！」

柊も、風の剣を創り出した。

カザツルギ

「風剣！ー！」

一瞬、自分は死んだのかと思った。

だっておかしいもん。なんで・・・なんで・・・

「なんで狐が出てきてんだあアアア！？」

わらわらと白い物体が。

それは紛れもなく、狐だった。

柊を一瞥してからすべての狐が、冥堂に食らいつく。

「ひいらぎー！今のうちに風剣の強度をあげちゃいなさーい！」
聞き覚えのある声が。

ちよつとびっくりして振り向く。

「り・・・凜。と、その他の神々・・・」

「その他言つな！」

怒声が返ってきた。

「今はそんな事言つてらんない！私達も援護するから気を集中させて！そうすれば強度があがるから！」

凜がぴつと人差し指を冥堂に向けた。

目がきらーんと光り輝く。

「いつけー！」

「リーダー気取つてんじゃねえー！」

湾が喚いた。

そして凜に治癒を命令し、自分は玉砕覚悟で突っ込んで、言った。

「冥堂！此処で憾みはらしてやらあ！」

柊の隣を、俺がするりと通り抜けていった。

まるで風が吹くように。まるで水が流れるように。

「お前に足りないもの・・・分かった」

「は？」

柊が間抜けな声をあげた。

そつえばいつか言われたっけなーくらいの事を思つて、首をかしげた。

「集中力、だ」

学校でも家でもよく言われた。

お前は集中力がない、と。

反論するでもなく、ああたしになあ・・・と思いにふけた。

「いいか、気を固めるんだ。少しでもいい。短時間で、より強度に。

きつとこれはお前向きの力の上げ方だ。やってみろ」

こくんと、柊は頷いた。

風剣を持っている手に、ぎゅっと力を込める。

「やってみる・・・！」

（うつけ、力が入りすぎじゃ）

「え？」

紛れもなく、千代の声。

千代のいるホルマリンの大瓶を見ても、変わった様子は無い。

（テレパシーと言えば分かるか？直接お前の脳髓に語りかけている）

「千代ッ・・・！無事なのか！？」

（ちよつと苦しいが、大丈夫じゃ・・・。わしも手伝うから、とつとと強度をあげるのじゃ）

ぶんぶんと頭を振って、もう一度握りなおした。

力はいれすぎずに、抜きすぎずに。

「うん！準備オツケー！」

（よし・・・やるぞ！）

すると、手にひんやりとぬるりとした、なんとも言えない感触が走った。

「ッ・・・」

（我慢しろ。気を込めろ）

また握りなおしをする。今度は何があっても離さない。

「冥堂！！」

「・・・久しぶり。旧名で呼ぶのは止したほうが良いのかな？」

光と光がぶつかり合う。

水と、炎と、土と、全てが冥堂を標的に飛び出してくる。

その周りには守護たちがいて、処罰の用意を整えていた。

そのとき。

「！！！？？」

全員の体に悪寒が走った。

それとともに、強い気。

「っこれ・・・。柊か！？」

一斉に柊を見る。

透明の気が、柊を優しく強く包んでいた。

「ふん・・・」

ばつと、冥堂がすり抜けるように出て行った。
剣を構える。

「冥堂！」

一瞬の出来事に、追いつけない。

狐でも、神でも。

「死ねええええ！」

かつ、柊が目を見開いた。

「いけえええええー！！！！！！！！」

立ったまま、二人は互いを刺した。

倒れもせず悲鳴も上げず苦しみもせず。

その時

ユナ・・・

咲の顔が引きつり、震えた。

[illegible]

その数秒後、冥堂も・・・。

ばた・
・
・
・

互いに、地に臥せった。

第四十八話・全てが終わりを告げる。

勝利の女神は、どちらに微笑む事も無い。
実力まかせで玉砕覚悟で……。

「やだああああー！いやあああー！」
臥せったままの二人。
叫び声が木霊する。

しゃきん……

鋭い剣の音がした。

煌々と輝く光の剣。間違いないく、立ち上がったのは冥堂だった。
脇腹から赤い血がばたばた流れ落ちる。

あまりの光景に、五大神も麻貴たちも動けなかった。

「……許さない……」

らんらんと、目だけが大きく輝く。

獲物はもう戦う力を持っていない。

仕留めるなら、今。

「え……？」

かきん……

鈍い剣の音が、震えるように鳴り響いた。

わなわなと震える足で、剣を軸に立っているその華奢な体は、今にも折れそうだ。

胸から血が、あふれ出す。

止まる事を知らない血は、何処へ流れ出たいのか。

「ひ・・・らぎく・・・」

かすれた声は言葉にならない。

麻貴の、音魁の、咲の目に大粒の涙がたまっていく。

透明の雫は、落ちないように持ちこたえるだけで精一杯だった。

「しぶといね・・・」

「てめーこそ・・・」

柊は生きていた。

戦う力など残ってない、それでも立ち上がる。

手を、握りつぶすように握った。

なぜか鋭い痛みが走り、びくりと肩が揺れる。

「な・・・?」

しゃらん・・・

大きな赤い珠が揺れる。簪の、珠。

いつも千代が身に着けていた、千代の目にそっくりの、赤く大きな珠。

「俺に・・・貸してくれるのか・・・」

蛍光灯から青白く降り注がれた光に反射し、

それは鈍く素敵に光り輝いた。

「もうちよつとの辛抱な・・・千代ッ・・・」

風剣を地に投げ捨てた。

からんからーんと、乾いた音とともに風化していく。

「戦闘放棄・・・? 武器が無くなったら戦えないよ」

俯いたまま、ピクリともしない柊。

それが、冥堂の理性を逆撫でする。

「何とかいいなよ・・・」

うんともすんとも言わない柊は、そのかわり顔を上げた。
目に光が宿っている。

「その目・・・気に入らない!!!」

獣が吠えたかった。

光の剣は、もはや刹那にちりゆくものと化す。

「感情ぶっこわれてんじゃねーのかてめえええー!」

ぐさあああ!その簪を冥堂の胸につきたてた。

赤い鮮血が、あたりを汚した。彩った。

宙にキラキラと舞い、ばしゃばしゃとえげつない音を立てて墮ちゆく。

墮ちたのは、冥堂だった。

「く・・・そ・・・っ・・・」

倒れた冥堂は、みるみるうちに消えていく。

脆かった。諸刃の剣。ガラスの体。

「せめて安らかに眠ってくれ・・・」

暗闇はきつとなくなるだろう。

空はきつと晴れるだろう。

キミはきつと、僕らの元へ帰ってくるはずだ。

全てが終わりを告げる。

ぱりーんというガラス音と、ぱしゃぱしゃと流れる緑の液体が
終わりを、強く告げた。

「や・・・ったの・・・?」

その液体に身を任せ、少女の姿に変わった千代が、流れ出てくる。柊よりちよつと大きいくらいの背。

凜が、それを受け止めた。

長い髪は、滴る雫で煌々と激しく煌いた。

「・・・っ」

目のやりどころに困る柊たち。

幼女でも直視できない体なのに、成長したその体を見れるわけが無い。

「なに固まってんの・・・。帰るわよ」

すつぽりと、顔に狐の面を被せた凜が、顎をしゃくって出口を示した。

そこには結界が解けて中に入り込んでいた銘銘が。

「銘銘！」

『無事だったようだな。すぐに雷雲布を用意するから待っている』

「あ・・・あの・・・あたいどうスレバ・・・？」

仮面の下からでも分かる優しい微笑を、凜はリーメイに向けた。

「あたしが引き取ってあげる。一緒においで」

ぱあああつと、歓喜に包まれたリーメイはうれし泣きなのか頬に涙を伝わせた。

何度も何度も、しきりに頷く。

すべての終わりを告げたのは、死ねない少女。

第四十九話・さよなら！

風はさらさらと流れた。

雲はゆらゆらと流れた。

僕らの旅は、炎が消えるように終わった。

さよなら

雷雲布は意外に心地よかった。

蔭と咲に怪我の手当てをもらったあと、咲に散々怒られた。

お前は後先を考えなさすぎだとか、私がどれだけ心配したか分かっているのかとか。

でもそれは、本当の本当に心の奥底から咲が自分を心配してくれたのだから

なにも文句は言えず、俺は苦笑いするしかなかった。

麻貴は凄い剣幕で俺をしかってくれた。

今でも感謝してる。ありがとっっていったら、どうしたの？頭打った？なんて言ってきた。

音魁は何も言わなかった。そのかわり笑った。

顔についた傷。あいつは隠さずに曝け出していた。やっぱりあいつは強い。

ころりと寝転がった時、俺が何かを持っているのに気がついた。

「俺、なんだそれ？」

緑色の液体に、瓶。見覚えがある。

そしてその中には……目玉がひとつ。

「なななな何でそんなもん持ってたんだよお！？」

「これか……。これはあいつの左目だ。あの部分だけ髪で覆ってただろう。」

この目玉に禁術が押し込まれていたんだ。だから俺が持つて帰って成仏させる」

柊は、この人は心底おかしな人だ、と思った。

ふっと見上げた俺の顔は、悲しそうな、安堵のような顔だった。

「俺らが見捨てたんだ。あいつを。助けられなかった」

「上手くいかないもんだな……」

柊は、千代を一瞥して頷いた。

その後千代はいつこうに目を覚まさなかった。

「なあ、どうしてだよ？」

「黙っててよ。今あたしが治療してんだから。リーメイ。二番目の棚の錠剤取って！」

此処に来てから、リーメイは忙しく働いた。

「ハイ！」

心なしか笑顔でいるときが多くなった。

今は治療中なので笑顔でいるときと凜に怒られるだろうけど。

「千代サン、目覚めませんネ……」

「大丈夫！あたしがいるんだもん！目を覚まさせてあげるわ」

寝具の上に寝かされた千代は、大きかった。

もう立派な少女だ。背丈で言えば、蔭と同じくらい。

綺麗で長く伸びている睫は、濡れているようにみえた。

その時に

「んう……」

ふわりと、目が開いた。

大きくて紅い目が、顔を覗かせる。

「千代！」

「なんじゃ・・・柊か・・・。あれ、凜様？・・・お前は誰じゃ・・・あれ？わし・・・」

「助かったんだよ千代ッ！」

しきりに腹の辺りを撫でる千代に、現状を教えてやる。

ぽかんと呆けていたが、赤い目に透明の涙が溢れ出した。

ぽたぽたと白いシーツに染みを作った。

顔をくしゃくしゃにして、それを見られたくないのでシーツで隠す。嗚咽を漏らしながら、千代は泣いた。

「さて、柊たちも元の世界に帰んなきゃね」

ばんばんと凜が手を叩く。するりと具象化した漣が現れた。

無駄に長い髪は何処までも何処までも続いているようだったが

顔は言葉では言い表せないくらいに美人だった。

『久しぶりね。可愛い子猫ちゃん』

寒気が走るような喋り方は相変わらずだった。

「この子達を、元の世界まで連れて行って」

「ちよつと待って！私たち・・・帰っていいの？」

「もちろん」

凜の答えは意外にあっさりとしていた。

なんかあっさり捨てられた気分だ。

「ただし、用があるときはまた呼びに行くから、覚悟しといてっ！」
がたん・・・と、窓を開けた。

涼しい五月の風が、遠く海原から吹き抜ける。

「蒼く輝く漣よ！今風を我が身に宛がい風魔を呼び寄せろ！」

空中に体が舞い上がり、そのまま地へと急降下していった。

「ばいばーい！」

凜が大きく手を振る。続いて湾と満と蘭と煩も。

当然の如くか、斬と庵と蔭と秦は手を振らなかった。

リーメイが笑ってるのが見える。

そして、千代も……。

「わがつ！？」

どすん。

何処かに落ちた。

見たことのある風景、八神神社。

「帰ってきたんだ！ホントに！」

咲があたりを見回す。自分のデジタル時計を見て、首をかしげた。

「どーしたんだ？」

「私たちが天界へ行った日の次の日になってる。日付が」

『ふふふ。天界は此処より時間が流れるのが早いだよ。気にしないでいいわ。』

でも、私たちは実在しているの。いつかあなたたちに会いに来るからね。

その時はヨロシク！可愛い子猫ちゃんたちっ！』

「頼むからその呼び方やめろ！」

音魁が怒鳴った。

漣はくすくす笑って、具象化のまま空へと上がっていった。

「ってゆーか、どーするよ。この衣装……。」

柊たちは、なんかおかしいな民族衣装っぽいのもまだあった。べつにそんなに大したことはないのだが、やっぱりコスプレに見える

るのだった。

エピソード・それは終わらない歌のように

家に帰ってきた柊はまず母にその服装を驚かれ、外泊したことに父にぶつぶつと文句を言われ、最後に姉になんか薄汚れている格好を見てけらけらと笑われた。

「おっはよー！」

遠くで手を振っている。

くせ毛でわかった。あれはきつと麻貴だ。

そしてその横にいる長いみつあみの少女は・・・

「柊おそーい」

文庫本を手に溜息をつく咲だった。

きつちり編まれているその髪は、とても戦いで武器になったとは思えない。

「おっす、柊ッ！」

上から声が聞こえる。

八神神社の鳥居の下に立っていたのは、音魁。

巫女のようななんかよく分からない服を着て、手にはお払い用のなにかしゃらしゃらした物を持っている。

「柏手、打っていけよ」

悪戯っぽく笑った。

こくんと頷き、柊は駆け出した。

それに続いて麻貴が走り出す。咲は呆れたように笑って、自分も石段に足をかけた。

そこは何も変わらなかった。

いつか、千代がふてぶてしくすわっていた境内の一部がぽかんと穴が開いたように寂しい。

「帰ってきたんだねー」

麻貴が高い高い空をうつとりとした眼差しで見上げる。

何も見えないけど、何かがいる、そんな感じがした。

「大変だったね」

咲が薄い半そでのカッターシャツの袖を捲る。

大きく裂けた傷跡。長めのスカートを捲ると、そこには縦に肉が抉

れたあとが。

麻貴がひつと短く悲鳴を上げた。

「い……痛そうだね。咲ちゃん……」

「これくらいなら大丈夫よ。心配ないわ」

ぼん、と麻貴のくせ毛に手を置いた。

安心したように、麻貴がにつこりと、それはまるで一足早い夏の向

日葵のような顔で笑った。

咲の顔がぼつと赤くなる。

「また、逢えるかな」

「迎えに来るって、言ってたぞ」

「そのうち来るんじゃないかしら？」

「そーだね！また逢いたいねッ！」

「そーかそーか、それはよかった」

聞き覚えがあるが、きつと多分絶対此処では耳にするはずのない声。

ソプラノかアルトかって言えばアルトの、低いけど特長のある

澄み切った素敵な声。

振り返ると

「千代！」

「しかも何！その格好は！」

千代は、咲ととてもよく似ている格好をしていた。

背が伸びたので、違和感はない。

そして千代の後ろには

「今日はデス。みなサン！」

またもや咲とよく似ている姿をした、リーメイがいた。

お団子頭と、日本刀は顕在していたが、
こんな田舎町でそんな物騒なものを持ち歩いていたら即逮捕される
はずだ。

「リーメイも？どうしたの？」

「いや、ちよつと散歩がてら様子を見に来た」

「昨日の今日で？凜はちゃんと仕事してんのかよ」

「蔭に見張らせてある。きつと大丈夫だ」

ふんと鼻を鳴らした。ふてぶてしい態度は変わっていない。

「そうじゃ、散歩がてら来たついでにこれを預かってきたんじゃ」
かさかさと紙が擦れる音がして、一つの紙切れが手渡された。

習字紙に墨でテキストにかいてあるかなりのアバウトさ。

それはぽんと煙を上げて、電話にはや代わりした。

耳をあててみる。

『あーもしもし柊イ？あのさあ、一段落ついたとこ悪いんだけどおー
ちよつとさー、氏神サン虐殺事件が相次いでんのねえー。』

犯人も検討ついてるし、あたしも忙しいし、（ってゆーかあたしに
来た仕事なんだけど）

ちよちよいのちよいつと始末つけといてくれない？』

堪忍袋の緒が切れたのはじめてだ。

「ふっざけんじゃねええー！俺らはオメーの道具じゃねーん
だ！」

『守護じゃん。道具でもなんでもいいから早く来なさいよ』

「ヤダ！あんな自殺行為みすみすやれるかー！ー！」

『やるやらないは勝手だけど、あんまり騒ぐと……』
しゃきん。

柊の首に冷たい鉄が当てられた。

「つべこべ言わずにさっさとやってくだサイね」

につこりと笑うリーメイの日本刀だった。

思わず冷や汗が出る。これは断るに断れない。

「は・・・はい・・・やります・・・。やらせていただきます・・・。」
「ハイ、最初から言えばいいんですよ。柊サン」

五月の風につて、

柊たちの戦いは終わることを知らない歌のように

どこまでもどこまでも、続いていくのだ。

エピソード・それは終わらない歌のように（後書き）

「水晶物語」シリーズ完結です！

長かったー。

終わってしまったけれど、感想・評価などはいつでも送ってください！とっても嬉しいです。

また次も懲りずにファンタジーを書こうと思います。

ファンフィクションもまだまだ続ける気です。

では、こんなつたない文章を読んでくださった読者の皆様、いままでもありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2329b/>

水晶物語

2010年10月9日18時48分発行